麻生路郎主宰

川柳雜誌

三月號

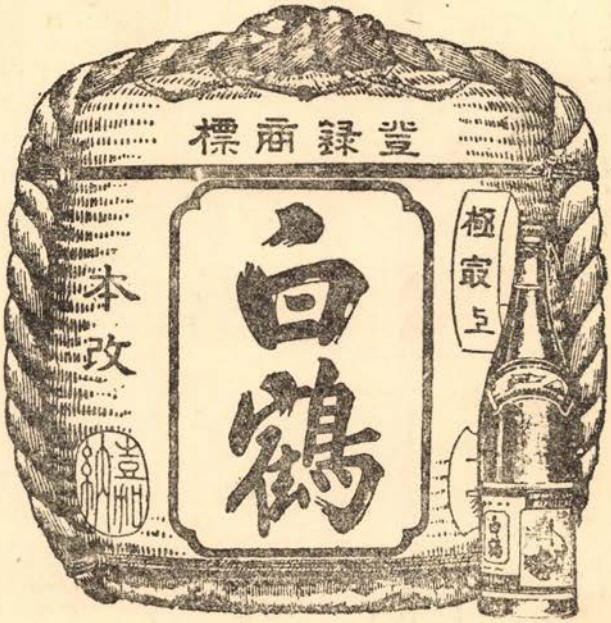
大正十三年三月三日第三種郵便物認可 昭和十年三月一日發行 第十二卷第三號(毎月一回發行)

清酒

賀正

白鶴禮讃

白鶴の瓶たまることたまること
白鶴へみんな揃ふたいゝ話
いゝ酒と言へば白鶴持つてくる
白鶴を一本つけてからの事
百事意の如く白鶴呑んでゐる
當選に白鶴樽のままで來る
貧乏の中に白鶴だけの味



攝津灘 嘉納合名會社釀

近作

麻生路郎

俳風松竹梅の會にて

酒なんか呑んでゐられぬ酒を呑む

生魂人形の圖に題す

前垂を外づせば南地あたりに居
おもちや一つあてがはれずに生きんとす

悼鳳治郎

君の訃に炬燵の穴もさびしまれ

關根博士(山彦)の外遊

洋行の肩をたゝくは同窓か

川柳雜誌第十二卷第三號目次

文苑

評月 街の高臺……阿部閑生樂……（三）

明治以後の川柳年表（一）……西島○丸……（二七）

柳壇雜俎……福田山雨樓……（五三）

武玉川二篇研究（十一）……梅本秋の屋 森東省 蛭子二……（三八）

TYPHOON以後……住田亂耽……（四八）

川柳バイロット欄……福田山雨樓……（五六）

雜筆春秋

鴈治郎……食満南北……（四四）

夢——酒……不朽洞……（四四）

女といふもの……麻生葭乃……（四五）

自由律異變……須崎豆秋……（四六）

彼岸の感想……岡田某人……（四六）

創作

近作……麻生路郎……（一）
近作柳樽……麻生路路選……（六）
川柳塔……麻生路郎選……（三一）
粒々集……長崎柳秀……（三七）
本社二月例會……毛利九波記……（五〇）
一路集……工場……山本雨迷選……（五四）
……商人……朝田新水選……（五四）
川柳光耀會……竹内機見女記……（三一）
各地柳壇……路郎、艸樂、汀柳整理……（五八）
柳壇畫報……（四）……川柳家戸籍欄……綠雨……（五四）
上汐町から……汀柳……（四四）編輯の窓……山雨樓……（七〇）
題字……檜重　表紙繪……きよし、鳥乎、宰二郎、しげを、路郎、合作

本社同人朝田新水君と蒐集の玩具

東郷川柳家富士野稼馬君と女優森勝子嬢
東京歌舞伎座楽屋にて一九三五・二・七日撮影)

本誌同人若嶋柳踏君（向つて左）
一九三三年一二・五日 朝鮮朝鮮
城舞鶴雪内の有名な靈龍を背に
して撮影

本誌客員經子省二君 一九三三・十一・八日
神戸の吉句研究家竹宮虚心君の撮影

近作柳樽

路郎選

蜜柑色づきて姉離縁さる　蟹ケ池　六朗

こんど來た人が痩せてゝほつとする　同

うがひする瞳かすめた夢の女と　同

頭痛膏はつた女が日をかぞふ　同

高利貸の手先自轉車で馳り　今治　心府

からつぽの財布に朝を嗤はれた　同

笹の葉の脂氣のない音に暮れ　同

軍人が來て盃でいどまれる　同

商ひの道を覺えた坐り胝　大阪　大門

乘り越してはなはだ目立つ子澤山　同

祝辭讀む尻押しに來る風の幕　同

お母さんのある倖せの羽織着る　紫ケ池　縷紅

お元日すゞめの踏んだ霜ばしら　同　同

元日の夕陽子供の頰に落ち　長野　有爲郎

霧白くながれ電車で運ばれる　同　同

塗りかへられて看板のさりげなし　同　同

元日の炬燵の柱にぎりゐたり　神戸　九葉

凡人へ正月もはや三日の夜　同　同

木枯がその氣になつた妓にきこえ　同　同

豊の雪勤めもつ身へすぐに消え　大阪　阿伽陀

漫畫欄あけて子のない女房なり　同　同

みんな留守乞食の首が垣根越し　同　同

縁談にすねてミルクをとかす晉　尼崎　觀月

親切をしたうぬぼれの戀ごゝろ　同　同

神さまを信ずる病氣とはなりぬ　同　同

買ふだけでさくらの役はつとまらず　仁川　可宵

醉ざめの水良心のおきどころ　同　同

妓生（キーサン）の細々とした肩もよし

十八の頃の浴衣をおしめにす　同

散髪屋師走の頭ねじむける　兵庫　天秋

取入れへ案山子の頭ふみつける　同

失業の友の賀状が見當らず　同

寒い日がつゞく茶粥のすきな母　愛ケ池　巷

物知りにされてでしやばりたくもあり　同

正月を迎へて

病院の匂ひがしみたはれぎ着る　同

陳情にふと口髭を意識する　高知　梨生

呼鈴は商人の押すものでなし　同

舊友とチップの要らぬとこで醉ひ　同

戀捨てゝ看護婦長になる野心　刀根山　沙門

人間の息ひきとれば汚ながり　同

腸を病む

林檎汁眼玉ばかりの顔になり　同

いわしからいわしの匂ひぬけてゆく　盞中　耕朗

平井小松君の開店を祝して

前かけのよごれる度に儲けてる　同

お燈明鼻が明るくなつて來た　同

カンフルの積り魚屋水を打ち　今治　文庫

ミシン踏むのも運命よ未亡人　同

春の川鮒もやつぱり獨りもの　同

膝まくら良心のある眼をつむり　高知　翠葉

花魁のさびしさ帶の金の糸　同

雜煮餅うれしく眼鏡くもるなり　同

屠蘇氣分のんびり突いた玉の音　大阪　清美

張ちきれる希望を抱いて春を呑む　同

麥の芽に春を覺えた松の内　同

思ひ出は勅題の彈けず泣いたこと　松江　雛千代

元旦は鬢のほつれもなかりけり　同

元旦や色とり〴〵に舞妓ゐる　同

別室に臥つてる人を訪れて（二句）

痩せたかとまともに顔を見られたり　藤ケ池　十五才　愛香

ますくから笑ふと伸びたひげが見へ　同

空腹の夜うどんやとすれ違ひ　同

柿の寺鐘を撞くなと書いてある　今治　輝親

高知柳壇の方々へ

短か夜や南の國のものおもひ　同

出漁中の夫を待つ土佐の女人に捧ぐ

夫を待てど夫は黒潮の果に居て　同

露のある鐵棒をする寄宿生　松山　耕一路

煉炭の十二の穴をみなあぶり　同

ミシン臺髪をはねつて裏を縫ひ　同

さもなくて十九寂しい春となり　名古屋　崙喜固

ポケットに幾何もなき金鎖　同

軒燈で手帳の略圖確かめる　高知　愁人

掛引の無い算盤の艶もよし　同

灸跡の太つた儘で婚期來る　同　稲美

結局は金だと知つた夜の底　同

賑やかす酒癖マダムに持てゝゐる　長野　柳兒

妓の理屈男に懲りて居て強い　同

若旦那型は嫌ひと云ふ女給　大阪　いの助

風水禍返らぬことの裏住居　神戸　同

催促の手紙當字も憎まれる　同　吉左右

蔓んで居る眼へ醉つてつきあたり　大阪　同

使用人たるに甘んじ四十三　同　利生

薄給にゐて愛人もあるのなり　同　沐天

雛壇を旨く飾つて二十四五　同　同

貞操は愚問なりけり梅の色　神戸　巴

デダンダを踏んで泣く子の齒が痛い　同　同

元日の街を通つたナマコ賣り　大阪　水客

十七といふ妓三味線だいて逃げ　同　同

正月の機嫌を汽車はゆるく出る　竹原　春帆

世辭いへば矢張り人間うれしそう　同　同

おくれ毛も淋しく秋を泣く姿　愛媛　宵明

資本家の犬の悲鳴をきゝたがる　同　同

鱈一尾樵夫の冬を越す暮し

想ふこと多き此頃の私

すぐに睨むと子供等が云ふ　螢ヶ池　青鬼

病める子供等と語る

癒つたら――子供の空想はうつくしい　同　大阪

正月へ面と向つてたぢろぎぬ　えいを

十錢の手相氣になる事も聽き　同

鼻をかむ男、男のしわを寄せ　久米雄　鈴戸

方言が窓から消えるおもしろさ　同

出て舞ふた妓への拍手に猪口をおく　孤鶴　愛媛

まあ座はれ喫ふた煙を太く吐き　同

理に落ちて明日の足袋へ運ぶ針　玲翠　長野

春淺し途切れ〳〵の心抱く　同

北風へすくめばバスも空だつた　流汀　今治

この暇を晦日へゆづりたい床屋　同

元日の朝痰壺ほかしにゆく　一更　螢ヶ池

人間の力だけ藥効くなり　同

兒の爲に曲つた事も考へる　丁路　京都

タークキーが解らぬ叔父の丸い顏　同

ニンヤリと信號無視も藝妓ですライト　大阪

御下賜金ブラシをかけた靴をはき　同

顎のせて炬燵へ思ふ事多し　秋田　醉芳

良心は素面で言へぬ事があり　同

我慢してさびしく見入る俺の影　島根　琴月

うす暗き灯へ母のプロフィル　同

子の掌に乘つた蟲の臆病　大阪　紅桃子

かけた毛布に愚痴のあと見る秋晝寢　同

元日も制服で行く戸をあけて　同　公子

活花の先が曲つた兒の寢息　同

日本髪が優勢となる初春の風呂　岡　不路子

本願寺太い柱に手をつなぎ　同

病中吟

禁煙を言ひ渡されて空靑し　島根　春朗

零落の庭に百日紅が紅い　同

除夜の鐘解放された氣でねむり　今治　紫陽

ウドンヤの二階大正琴が鳴り　同

珍しく伯父が來てゐる嫁の口　奈良　葉魚

工場の汽笛バツトを消して立ち　同

重役の箸見つめてる忘年會　大阪　曙衣

大晦日ラヂオ何やらやつてをり　同

病んでゐること賀狀には書いてなし　螢ヶ池　錦雀

初仕事ならぶ女工は日本髪　同

盃に馴染めば父と同じくせ　大阪　木圭

タイピ・スト會社の退けた髪でくる　同

窓あけて枝の雀が美し　今治　蛇之助

鮮人の話茶葉をさげてゐる　同

かけひきをして春を賣る女かな　大阪　破鼓

病院へ火葬場から年賀狀　同

コスモスが好きで療養所の白衣　札幌　非常兒

療友を見舞ふ

死を覺悟して僞りのない姿　同

ペン先が錆びてる窓の病み呆け　入間　美沙女

訪れて南天の葉の搖ぐの　同

三越の門で邪魔する社會鍋　大阪　素

一升を提げた姿も十二月　同

まだ生きて居さう愛兒の百ケ日　竹原　都子

ヨイトマケ女意外に若い聲　同

かび臭い紋付も居るバスに乘り　奈良　朱金抄（双葉敬ノ）

かすのこのふやけた頃は大晦日　同

小作らの三人寄ればふりむかれ　今治　尼花

債權の下駄山茶花を踏みつぶし　同

臨檢へ隣の家が目を覺し　神戸　海中金

義理といふ中に育つて目の險し　同

ポマードの瓶の脫け毛へ氣付く齡　大阪　牧人

正月も日銀支店硬い顏　同

涙もふかず女の自嘲　松江　砂夫

さるにても自尊の鼻をなでゐたり　同

拂はぬと決めて家主の顏おかし　金澤　立帆

又一つ年をとります慈善鍋　同

吸入器女の顏の鼻の穴　松山　ルミ

里の母俺の歳など知らぬ樣　同

あきらめる事にも馴れた水藥　岐阜　京糸

うか〳〵と鈴蘭燈の下に來ぬ　同

なんだすと聞けばこちらの噺しです　富山　照坊主

きつかけに下を出られる恐ろしさ　同

新曲がまた往來の夜をせばめ　大阪　皐山

朝刊と出合がしらの早出なり　同

凶作の犧牲に街の酒を酌ぎ　名古屋　三八郎

久方に父と飲む夜の雪催ひ　同

マージャンをしてると父もまだ若し　今治　小松

部屋へ通し吾が正體を見ぬかれる　同

東北の話しを子等に聞かす冬　京都　正祐

一枚の銅貨拾はぬアスファルト　同

かけつけた電話へ耳の筆が落ち　東京　史葉

團體へ東京の道みな廣い　同

社長から御無理云はれた嬉しさよ　島根　夢人

夜の炬燵憎い男とそりが合ひ　同

云ひ負けて心は雲を追うてゐる　千黒山　一沐

高熱、盗汗に苦しむ

小指の爪折れて熱たかき日なる　同

云ひ切つた後の淋しさを見せじ　神戸　眞一

マスクして目の鋭さを指摘され　同

生きて行く惰性の朝を見つめたり　大阪　新市街

親の義務だけは果してやる積り　大和　翠峯

母六十二歳を迎ふ

亡き父の眼鏡度に合ふお母さん　大阪　葉光

門松をして寢に戻る小商人　同　節子

わが影坊子壁に道化て心死し　竹原　呂烈

年賀狀いやな奴とは思へども　大阪　菊路

居こもつて娘の春限りなく愁し　天國

賽錢の投げやうがあるいゝ女　名古屋　世香（合風改メ）

前借の遊び相手に畫の猫　竹原　蛙庵

鏝あてるをんなの顔が面白し　京都　白英

故郷にての松の内

元旦と云ふに素麺掛けてゐる　大阪　笙人

あきらめて着れば冷たい裾模様　今治　伶人

病床

牛乳とパンを欲しがる子が座り　神戸　木履

自由とは炬燵にねてる姿なり　今　小樓

農夫等へ釣瓶落つ陽のつれなふて　加賀　義風子

大空のどこへ不平をもつてゆく　弾丸　朝雨

傳統の軍歌が響く日本晴　岡山　汀雨

借電話おせじを一つおいて來る　長樂

今日だけは持藥をやめんお元日　石川　しとし

肩書があつてマダムの純喫茶　大阪　はるを

羽子板の似顔に娘好き嫌ひ　三碧

飼犬の死を弔ふ

主よりも先死ぬ犬は仕合せだ　高松　柳夢

解散に浮草殿のおびえやう　竹原　直

上品に飲めばまはりの早い酒　今治　一風

愛の巣を二度斷られる萬歳師　大阪　白葉

年の市福引場所で又出合ひ　奈良　青柿

カーテンを引いて女房の顔をそり　竹　芳泉

町内の景色へバーが一つ增え　大阪　歌都路

新妻と歩けば友によく出逢ひ　名古屋　絃靖

麥をふむ足がわたしの下にある　今治　十靜

閑運と暦に乘つた春氣分　東京　不二號

長男としてモーニングよく似合ひ　大阪　雅星

衞戍病院加療中の友より便をうけ

遊べない金が澤山あると云ふ　松江　四郎

初賣をすませた旦那朝の風呂　金澤　綠水

花街を拔けた寒行の聲高し　大阪　晤栽（さとし以メ）

日曜を奉仕トラック婦人隊　同　花鳥

取りに來た家賃へ見せる受盥　同　清彥

決心は強し手ぶらで國を出る　東京　東游

金のないのに賣出しのビラを呉れ　大阪　寒草

信心の水はつめたくなかりけり　神戸　霞川

夕ざれば待たるゝ父母を持つ果報　石川　秀峰

團體のいつち了ひは老夫婦　松江　山川兒

世智辛い話に溶ける角砂糖　大阪　山海子

これ以上云ふて見たとて他人さま　神戸　十三也

カウンター責任すんで厚化粧　　琴泉

城崎溫泉にて

歸る日の湯はなんとなう長うなり　尼崎　正柳

ぽつねんと立つてもと來た枯野見る　高知　翠洞

赤らめて笑ひ返した初戀よ　島根　章泉

朗らかな女が見せる赤い口　今治　比呂史

競り市に思ひがけない福壽草　宇治山田　吉凶庵

露天風呂ぽつかり浮ぶ月を汲み　伯耆　一柳

大空へ月ありて寂し情熱よ　島根　健芳

虛無僧の手袋指の先を切り　大阪　墨州

ある百姓散髪にくる

紙卷いて帶に卷いてた調髪料　奈良　眞人

佛具屋で慾なんかない二人なり　岐阜　飛春

大言を吐いて淋しい獨りなり　兵庫　僖一

不覺にも服へ忘れた花名刺　大阪　玉葉

株の價にこだわりもなく兒は眠り　愛媛　草樓

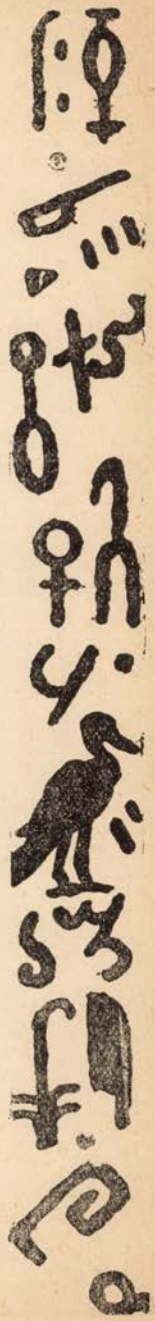
サービスが胸にこたへる歳になり　同　喜子坊

うたがいの文字ばかしなる日記なり　大阪　千世女

山と競馬

登山靴子はのびのびとのびのびと　公子
三笠山二人きりなる煙草の火　同
山好きへ急に豫定を變更し　機見女
山の氣に育つて人にうとまれる　同
御神火の山を眺めて二人の夜　亂耽
つゝがなくゐて富士を見ぬ寢臺車　同
山の便り心のうごく雪となり　葭乃
割引でバスで競馬に行く姿　公子
へそくりで買ふた馬券をにぎりしめ　機見女
勝競馬人の小袖をくゞり去り　同
紙幣束となる馬宙をとんでくる　亂耽
醉ふてきて競馬マニアのウエトレス　同
ルンペンにまんまと入りし割戻し　葭乃
プラツトの風もほがらか騎手を賞め　同
負けたとて且那に出さす馬券なる　同

如月とは云へ小春のやうに暖い日の午後を例によつてキンゲに集りました。丁度この日は編輯日と重なりましたので葭乃先生と二人だけで作句しました。時間が餘つて短冊のお話などしてゐる所へ亂耽さんが見えらましたので、評議一決、こゝより本社事務所へ總動員する事になりました
川柳光耀會二月例會・二月十七日午後二時・於キンゲ喫茶室（機見女）



月評　街の高臺

西田艸樂
阿部閑生

艸樂・閑生兩氏が別箇に批評されたものを併出した。（編輯局）

（一）

美人とは、容貌の美しい人を云ふ、おかめでもひよつとこでも心さへ美しければ美人だとは、道德的には、美文的には言へるが一般に通用する言葉ではない。彼奴は人間でないといつた處で、惡人でも、薄情者でも人間以外の何物でもない。畜生、けだものと惡罵を浴せても、それは結局人間の或る部分を表現した修辭的の言葉に過ぎない。

内容ばかりが、詩の全體の如く考へる事は形態を無視したもので、散文と詩を混同する蘆花の「自然と人生」は内容は詩韻に滿ちてゐるが、あれは散文である。

心の美しい人は、心の美人といつてよい。惡作の詩は拙い詩といつてよい。私は顔、容の美しい人を美人と呼び、形態の整つた詩を内容論の前に先づ詩と稱へるのに躊躇しない。修辭的、美文的の稱呼を以つて、科學的の理論を曇らせたくないのである。

その手法

巡禮を押しのけて時雨通り哉　阿伽陀
質札のひそむ財布と眠んだり　朝雨
糸瓜糸瓜俺の拳固を受て見よ　耕一路
輪轉機浮世がいやな日もあらん　英賀夫

以上の時雨、質札、糸瓜、輪轉機は擬人法で扱つた句であるが、此の手法は、獨り詩歌のみでなく、文章に、話術になくてならぬ一つで、その巧な應用は内容を躍動せしむるに非常に効を奏する。右の糸瓜の句なぞは最もよく、作者の感情を盛つてゐる。その他の句

は内容は兎も角として、新らしい手法ではない。茲では手法だけに止めて置く。

物體を擬人的に扱ふと同樣に、人間を物に擬へる擬物法がある。

無抵抗主義の裏手の陰　險さ　木　通
家か町の裏手かなんぞの樣に　言つた處に

手法がある。

かういふ事は、事新らしく述べる事は今更大人氣ないのであるが、近來あまりに平面的叙法が多くて味のない句が多いのに感じて、手法の研究のおろそかに出來ぬ事を主張する所以である。

推して知る全貌それが怖かった　牧　人
筒抜けの人生觀に氣を　合し　新市街
内心の空虛を充たす如く飲み　港　兒
バツト一本もらつていそがしい話　小　樓

と云つた風な句は、皆作者の謂んとする所は受取れはする。句が相當の内容を包んでゐる事に成功はしてゐるが、讀者に深い印象を與へ難い點に損がある。といふのは、推して知る全貌、筒抜けの人生觀、内心の空虛、いそがしい話といふ語が、抽象語である爲に、讀者の心を一點に縛りつけて動搖を許さぬといふ力強いものがなく、一見疑惑と、低迷を餘議なくするので、作者が感じた程の感を與へ難いのである。

そこに到つて、繪畫的、印象的表現が尊重される所以が明かとなる。

ロケーション臍まつかる川へ逃げ　丁　路
こんな風に「臍までつかる」とはつきり印

象を與へてくれると、抽象的に深い川といつた語より遙かに強い感銘を受けるのである。

以下印象的の句を撰んで見る。

ボーナスは妻の指先から離れ　青　兒
あてらかてお國へつくす白襷　水　車
直角に質屋の中へ折れ込んだ　豆　秋
抜けそうな梯で猫を抱いてゐる　柳　次

物象を描いて人の視覺に訴へる。正に有聲の畫である。單に視覺に訴へるのみでない、聽覺にも、觸覺にも訴へ得られる。

吸ひ込まれさうに變電所を覗き　春　秋
ダイナモの怖ろしく鳴り響く音が聽覺に

訴へ中樞神經を刺戟する。

指先も胸もふるへた御下賜金　白　峯

神嚴な空氣が總身の觸覺を傳ふ。

かういつた、繪畫的とか、感覺的とかの藝術は、事新らしい傾向である如く、多くの詩人達が謂ふが、これは當然かうあるべきもので、こんな手法は古くから用ひられてゐたのである詩の中に繪を描く事は、ホーマー以來の傳統であると云はれる。ホーマーの詩の年代をはつきり知らぬが、暴君ネロが、ローマを燒いてその天をも焦す火を見ながら、ホーマーの詩と競つて作詩をやつた小説を讀んだ。どうせ二千年の昔に溯る問題である。

感　懷

句は作者自らの記念塔として貽し置くがよいかゝる塲合徒らに技巧に去り、文字の去に拘泥するは反つて事實を枉げ、一貫した感情を亂す虞がある。

不平書く爲でなかつた日記帳　天　國
滿月へ逢えぬなどゝは考へず　あや美
意地惡に姉の古着を見破られ　梅　子
なまじ戀あり嫁ぐには惠まれず　節　子
言ひ負けた肱枕なり裾寒し　京　糸
自ら慰め、自ら嘲り、自ら恥らふも皆人生

の記念である その胸奥に宿る情緒を句にものする事は、個人の記念塔であるから、なるべく眞つ直ぐに詠みたく、たとへ技巧が拙づくても、手法の至らぬ點があつても、作者の内心からほとばしり出づる句にこそ、内在の詩があるので、それを十分に吐露する事が、

文字や形態よりは重要なのである。それにしても、日記帳の句、肱枕の句よく感じが出てゐると思ふ。その他の句も、形態、律調が整つてゐるいゝ作品だ。節子さんの句に七五五となつてゐる。かういふ型も私はいゝと思ふ。

シムボリズム

作者がそんな意圖で詠んだか、どうか知れないが、文字以外に何物かを暗示する句、正にシムボリズムと見るべきものが、二月號にも少なからずある。

ころげゆくたまの妙なる音　愚籠
落ちぬれた椿のこゝろになり　夕鐘

靈鷲山に於て、三千の衆徒を集めて釋尊が說教をした。その說教が卓を叩いたり、身振をして喋つたのではない。無言のまゝで、波羅華を捻じて集つた大衆に示しただけだとある。草木の花を捻つてどんな說教になるかいくらお釋迦樣の御示しだとて、有難くも何ともないのが三千の衆徒であるから何の事はない狐につまゝれた形である。その三千人の中でたつた一人「わかつた」といふ顏つきで破顏一笑した者がある。これが迦葉尊者といふお弟子である。そこで釋尊、奴ッ一人はわかたな、と思召されて、始めて簡單な口を開かれる。

「吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門あり　敎外別傳、不立文字、これを摩訶迦葉に附囑す」と、

たつた之れだけから禪宗が生れたと云ふのである。

つまり　シムボリズムの極端なものになると大禪宗の敎理が、お釋迦樣が波羅華を捻らつしやるだけに含まれる事に歸着してしまふので、シムボリズムの句や詩はそれほどにはなくても、度を過ごすと、何の事か讀者がさつぱり解からなくなつてしまふ。

我國の國體が三種の神器で　智仁勇が標徵されてゐる位な事でも、說明を聞く迄では判らぬ者が多いのである。だからシムボリズムの深い句は三千の衆徒の中から　一人の迦葉尊者を見附け出す覺悟が要る。殊に川柳の如き僅かな文　に托して　物事を表象せんとすれば勢い難句に陷入り易いので、悟りやインスピレーションに訴へるといつ處で、無理が多い。

右のこ句に於ても、永い病院生活の愚籠君の環境を知つてゐる者や、夕鐘君の性格を知つてゐる者には、その心境は察せられるし、強い感動を受けはするが、そうした豫備知識なくして見た人は　感動の度が果してどの程度のものか？　そこに川柳の大衆性が失はれて行く樣な氣がせぬでもない。詩なんか個人のものであるから　大衆性があらうがなからうがいゝといふのなら、そこに又新たな議論に逢着せざるを得ない。私自身の乏しい經驗として、シムボリズムのいゝ句に成功した事がないので、かうした句に出會ふたびに、おつかない氣がしてならない。（艸樂）

（一一）

催促に來て平凡な世辭となり　夕鐘

內容の寢雜さを缺く川柳ばかりが　多いのを窃かに歎息してゐたのであるが、この句普通には金借りに來て　世の常の世辭となるところを、催促に來てとスタートを切つたので日頃の歎きを俄かに吹き飛ばして呉れた。何か注文品の督促であらう、金の催促でないことは句の姿が明示してゐる。偶然の生から必然の死への人生には　最少五割の矛盾が含まれてゐる。この意識が無意識にはたらいて催促に來て世辭を云はすのである。世辭から更に催促へと轉換するを　讀者に負擔せしめた、巧妙な句法と云へやう。

病人がをしへてくれた雨の音　丹路

一瞬恐ろしい靜かさの中へ投げ込まれた心地がする、おのがじゝ家事にかまけて居て醒めきつたものは病人だけである。說明は出來ないが、その場の樣子がはつきりと眼前に浮ぶ。病人の心は冷かに澄んでゐる。未塵のさわがしさが無くて私の好きな寂しい句である。

十四日今日は義士の飲みに來。　某人

古川柳は本であり今の川柳は末であると云ふと叱られるかも知れないが、今の川柳がとかく粗奔になり散漫になりぶつきら棒になり勝ちなのに、左程でない句でも古川柳には和歌や俳諧で洗練された言の葉裏を活かした味があるからである。そして某人の句はそれに肉薄する迄字句をこなし句調を整へ得てゐる此句のみを指して云ふのではない。

吝嗇な人に稅金ことづかり　新水

市井の雜景中から句材を攝取するに特殊の機能を有する新水の句、すら〳〵と手輕に叙し去つて澁滯の影をとゞめず、あらはれたのは配符の紙にくる〳〵と卷き包まれた稅金そのまゝ手に渡された人の表情、それだけであるが充分に舞臺を引緊めてゐる喜劇の一場面を劃然と點出してゐる。

湯ぶねから玄關を訊く日曜日　柳秀

家中ががらんとしてゐるやうで日曜日の空氣を湛はしてゐる。玄關へ誰が來たやうだと家人が下婢を促したのか、玄關の客へちかに大聲を掛けたのか、取次ぎを風呂の中から聞き返したのか、そんな事を考へる必要なしに主人はいゝ氣持である、明朗であり飄逸のるところを頂戴する。知らず湯殿と玄關の距離幾ばくなるや。

飯は子に炊かせ國防婦人會　青兒

云ふまでもなく實寫であらう。都會ではこれがために夫人が家を空けがちで、遂に愛兒を不良少年にした家庭があり、田舍ではそこに養成される機關を得て、良人を輕蔑し出して悶着を起したのがある。何れも國防婦人會の直接の責任ではないが、賢夫人たちの持つ性格の一角を增長せしめた結果に外ならぬ。幹事さんの盡くことなき流暢なおしやべりに對する愛憎から、句の共鳴者は折半されるだらう、際物の句材がもつ特徵である。

淫樂に疲れ齒醫者で涎する　阿伽陀

痛快にやつゝけてる點よりも、淫樂と齒醫者の間に於ける大なる省略法に感心する。國防婦人會の句から急にこの句へ眼を轉ずると手を拱いて眺めてゐるより仕方がない。徹底さに文句の云ひやうがないのだ。なにも此方が涎することはない、そこ迄釣り込まれずに大膽な省略に就いて無言の批判をすればよいのだ。お師匠の辯まで知つて一の弟子、の句も穩やかだが　この句があるので壓倒されてゐる。

どの顏も內地へ歸るやはらぎ　耕朗

しばらく異鄕で働いてゐた人が故國へ歸る波おだやかな三等船室の一劃を描いた水彩畫のやうな句であるが、前書きによつてこれは列車中の情景であることが知れる。やはらかさの一語が最後のものであるか否かは意見の別れる所であらうが、これ以上强調する必要はない。內地へ歸るの好文字が効果をあげてゐる。

利に動く男扇子の構へ樣　新市街

功利的に動く人には一種の型があり厭味があるが、そう云ふ人が小賢しく立ち廻つて高慢ちきな顏をしてゆく世の中である。何事にも氣が利いて役に立つて、如何なる場合にも自己の利を念頭から放さない人物である大抵の人は、これに眼をくらまされてその一

擧一動を賞めはやす。しかし亦一觀察を下す者があつて、素早く扇の搆へやうに眼をとめ輕侮の念を以て ちやんと川柳によんで置くから、大いに安心する。

竹藪を汽車は同じ速さ なり　珍　景

當り前ぢやないかと笑ふ者は 自己の感覺の鈍さを表白するものである。そんなら何處がよいかと問はれたら 知らないと答へる外はない。何物をも描かざる如くして何事をか現はしてゐる。感じは單に感じであつて色も無ければ臭ひもない、厭味のない微かな味だけが殘る。必ずしも上乘の句とするのではないが清新の句と云ふに憚らない。

金策へ向ふも堅い膝で 居 る　柳　兒

氣構への堅さ 言葉つきの堅さが膝先で現はしたのである、自分が困つた時には金策を賴みに行けるか知ら、とは常々考へることである。更に自分の子供がそうした場合には何うだらうとも考へる。誰も彼も平氣で何度も賴みに來るけれども 自分の場合には何處へも賴みに行けずに、食はずに寢てしまうだらうと漱石も云つたことがある この句は金策に向ひあつた何方へも 片寄つた同情をせずに、側面から寫生したので佳句となつたのである

畫の痴話密柑の皮の味氣なき　九　葉

畫のちわが密柑の皮に 恰好の所を占めさしてゐる。障子には日射しが傾いてゐる、疊は古びてゐる、坐は白けてゐる。申し分がないではないか やめもしないが蓋じもせず、止め手がないので張り合がない。私には緣の遠い句であるが斯うものゝ調和が 揃ふてくると髓かに味氣ない句だと 賛成せざるを得ぬ。

荷上げ場 屆く二月の陽が親し　史　葉

寒いけれども節分が過ぎると、流石に日光の加減が變つてくる。日の當り場所が次第に賑やかになつてくる感じがする。青空の下で働く人たちは誰しも太陽に 感謝する念が無意識にある。陽が親しの語は二月の荷揚げ人夫をよく見て居る、素直で感じのよい句だとおもふ。

カンニングペーパ小使掃いて行く　大　門

躰驗か、追憶か、何事でも一度はやつて置かればならぬものだ。何が後になつて役立つかわかつたものでない。試驗の緊張から開放された間際の教室は、一川柳家のぼかんと登場すべき好壇場ではないか、其處には今の先まで全身の神經が集めて、恐怖に近いまでの注意が拂はれてゐた一つの紙片が、他の紙屑にまじつて別な階級から出てきた 小使の箒の先に紛れて行かうとしてゐる、行く先は何處だ。

此處彼處と社會の隨處に 醸されてゆく緊張が、程經てどれもこれも巨大な小使の箒でざらゞゝと掃かれてゆく、これを繰返すのが世態の推移である。凍土に芽む一草に自然の眞理を寫しだすのが俳句であり、反古の中なる一紙片に人事の眞理を摑むのが わが川柳である。一草一芽一片の紙と雖も眞理には擴がりがあり無限の發展性がある。然しながら眞理は身邊にあつて捕へ難く、禍は遠方より直ちに來るものだ。

長男の無口に母が草臥れる　大　門

誰でも云ひそうな 事だといつてそのまゝ見逃すわけに行かない。全部違つても 十七語しかないのだ、凡句と名句との差はほんに一字か一語の差である。讀んで見てゐてにんまりとして來るやうな句は必ずよい。他人の云つた事ではあるが 自分の何かにこたへるからである、然し正直一途な子供が易々と句材に使はれるのは可愛想だ。映畫でも芝居でも子役は成功し易いけれど何だか 効果以外にいたいけな氣持がする。しかも眞相は、良人の無口に妻が草臥れる。ではないのか奥さん以つて如何となす。(閑生)

明治以後の川柳年表

（柳誌柳書）

（その一）

西島○丸

川柳年表について

此の川柳年表は、狂句の返草は全然拔いた。見るのに邪魔であり、別にした方がよいと思つたから、他日一とまとめにする事にした。

それから明治三十七年頃までの分は一つ大目に見て頂きたい。それは柳誌といふより川柳に關係ある雜誌と云つた方がよい位であるからである。無論狂句關係も多いのである。ナゼそれを出すかといふにつき一言したい。

一つは、明治三十七年頃までの傾向を知つて頂きたい事、狂句の中番あたりの句を劍久兩氏の最初の句に見る事に、時代の動きを見て頂きたき事、一つは、川柳といふ稱呼劍久兩氏の創建といつた說に對して、私は「さにあらず」と云つた責任がある事も知つて頂きたし、まだいろ〳〵の理由があるからである。

又知つてゝ、この年表に暫く控へたのもある。たとへば、狂句欄のある娯目數誌、川柳とへなぶりに就いて（桂の家）、自然一ノ一、四十一年一月號の如き、論說其他の載てるのを出したいが、それも別に集めたいので、わざと遠慮して置いた。無論其方に手が廻り兼ねるからである。

「きやり」に發表した以上に殖えても居る、發行月日の其後判つたのもある面目を改めて今度は最終まで出さして貰ふ。

（書名、誌名）	（發行年月日）	（發行所其の他）
柳の庭 全一冊	（明治四年辛未三月（日不明））	辛未歲旦會出版、中本和紙狂句、六代目川柳序及選
柳廼榮 全三冊	（同未冬）	東京錦耕堂版、五世川柳追福會、中本和紙狂句

柳の栞　全一冊　（同月日不明）　滑稽文學に出づ、同名書他にあり

柳風狂句家内喜樽　全一冊　（明治五年壬申七月日未詳）　六世川柳評、和紙中本、蘭溪の序あり

新選川柳點繪草紙　全一冊　（明治六年癸酉月日不明）　小信壽、時雨堂閑人序、大阪版

（昭和七年甲戌）

（昭和八年乙亥）

宮島新柳樽二編

（明治九年丙子月日不明）　十方舍一丸壽作

團團珍聞第一號　（明治十年丁丑三月二十四日）　東京神田雉子町團團社發行、毎土曜發行、川柳欄を置く

滑稽風雅新誌第五十號　（明治十一年戊寅七月十日）　東京京橋尾張町開新社發行、狂句欄あり、一號は明治十年一月？

驥尾團子第一號　（同十月九日）　東京神田雉子町團團社發行、毎隔水曜發行、四六倍判

月とスツポンチ第一號　（同十月？）　東京神田興聚社發行、月二回、狂句

狂歌川柳名譽寄合　全一冊　（明治十二年己卯二月三日）　東京神田鍛冶町一九武井佐吉版、小林幾英畫、句に繪を添ふ

開化柳多留　全二冊　（同三月一日）　池田保編、豆本

四季花揃珍珍集第一編　（同五月五日）　東京神田雉子町團團社發行、岩崎好正編、豆本、十二編まで？

開化家内喜多留　全一冊　（同十一月日不明）　佃島水谷謹編輯、東京六寶堂版、六世川柳序選

柳亭種彦評古今二葉柳　全一冊　（明治十三年庚辰二月日不明）　東京日本橋石井虎吉出版、中本和紙

明治新調月鼈集　全一冊（同二月十九日）東京神田興粲社發行、篠田仙果編、和風亭川柳選、中本和紙芳年畫

親釜集　第一號（同五月十五日）東京神田新石町能舞子廻社發行、四六判、狂句欄を設く

教句川柳投書樽　第二號（同六月四日）大阪の發行、豆本

開化新選柳多留　全一冊（同十月一日）東京京橋大島屋發行、濱野千藏編輯、中本和紙狂句

面白奇聞話の種　第一號（明治十四年辛巳三月五日）東京京橋木挽町萬字堂發行、川柳欄を置く、狂句にせんりうとルビ

能弄戯珍誌　第一號（同四月十日）大阪北堀江珍々社發行、新句と稱し一頁とる、月三回發行

面白誌　第十六號（同四月二十日）月二回發行、左文花月氏ら盛に投書してる、狂句、菊判

川柳摘翠集　全一冊（同四月日不明）中本和紙

新選狂句川柳五百題　全三冊（同七月十八日）大阪雙書房梓榊原英吉編、中本

かなめ新聞　第六十九號（同十月八日）甲府櫻町八十報眞社發行、川柳欄あり、菊判

我樂多珍報　第九十四號（明治十五年壬午一月六日）京都下京區浮西京綸社發行、每金曜、狂句欄にやなぎだるとす

おもくろだぬ記　第一號（同一月日不記）東京京橋木挽町皷腹社發行、假名垣熊太郎編、中本和紙、狂句

しげり柳　全一冊（同午の春）六世川柳編、半紙判

へその宿替　全一冊（同六月日不明）橫濱弁天通小出留五郎版、川柳の部といふのを先に置く

女好路誌　全一冊（同七月日不明）東京萬町能舞子廻社發行、渡邊信平編、豆本、狂句

繪本新柳樽　全一冊　（同十一月日不明）　東京馬喰町山口屋藤兵衛發行、再版

翁まつり　全一冊　（同十一月廿三日）　七世川柳選、中本和紙、狂句

（六月十五日六世川柳歿、通稱水谷金二郎和風亭と號す、風也坊雪舍七世川柳となる）

狂句虎の卷（舊名一夜酒）　全一冊　（明治十六年癸未六月二日）　東京日本橋秋本滑稽堂發行、篠田須本太編、七世風也坊川柳閲

浮氣の友　第一編　（同六月十五日）　東京日本橋津久井吉左衛門發兌、倉田瀧治郎編、毎月一回、狂句

都度逸川柳月並集　第一會　（同八月日不明）　東京日本橋自由閣發兌、福田新三編、半分は川柳欄、和綴小本

狂句百面相　全一冊　（同九月日不明）　東京文盛堂梓、前島和橋編、七世川柳序、小本

武藏野叢誌　第一號　（同十月七日）　武藏北多摩郡府中驛成文舍武藏野叢誌社發行、西森武城編、狂句

初編畵柳（柳樽）　全一冊　（同十二月三日）　東京日本橋木村文三郎版、同文造編、小本

面白奇文團珍繪探　全一冊　（同十二月日不明）　東京日本橋通四丁目内藤加我編發行、川柳と名乘て出す

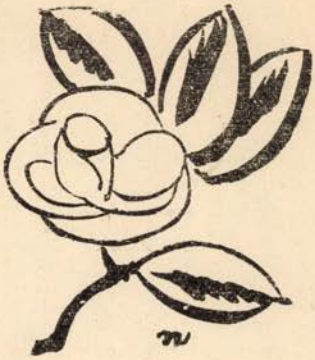
新選繪本柳多留　全一冊　（同月日不明）　よしふじ畵、風也坊雪舍序

魁連三題句集　第一號　（明治十七年甲申一月日不明）　會蛩雨燕、中本和紙、三分の一は狂句

北越柏崎夕開都々逸狂句集　全一冊　（同八月廿三日）　新潟縣刈羽郡柏崎德井豐七編、中本和紙

狂句百面相　上下二冊　（同十一月日不明）　東京府平民柳原友吉出版、清玉堂梓、前島和橋編輯、七世川柳序

――狂句百面相は袖珍本にして、明治十六年九月に出た再版らしい――



川柳塔

路郎選

住田亂耽

春あさく芦屋夫人の御光來

東念寺夫人をいたむ

冬の灯に牌も歎きに沈む色

玩辭樓遂に空しき記事となり

酒藏をうたふ（三句）

酒になる米無駄な程山をなし

酒藏の門トラックの幅でなく

きゝぢよくに冬の感覺すきとほり

麻生葭乃

あゝ金がでつちあげたる聲かそも

極道の圓タク朝の靄を行く

白粉の命忘れたチタニユーム

君の青私の青と違ふ也

君僕でかたづく女の世となれよ

關本雅幽

風景に枯木と石とあるばかり

花活ける其の淋しさよ二十六

風と水が光るばかりで空寒むし

態と貧乏してるやうに言ひ

手ほどきのあとで一杯よばれて來

山本丹路

驛長は影を拾ふて歩み居り
たゞ寒いだけの逢曳してもどり
醉ひもはや凡愚の鼻が光りそめ
御ン歳は三十がらみ觀世音
嫁さんがきた霧次裏の朝があけ

生田翠夢

情人が來ない女給に飲まれたり
ちろり並べて立春大吉
お連様の正體を見た金煙管
金煙管女の指は生きてゐる

福田山雨樓

耳敏くなれり四十に手が屆き
雜としてほこりの書齋いとしみぬ

深町氏令息ヴァテリヤで急逝

惡戯のあくる日はもう眠る國

橋本綠雨

松林爺さん婆さん揃ふて來
教はつた道を廻れば鮮人街
玄關に立てば奥庭花盛り

春元紀太

吾が耳に入らぬ批評の有難し
旅に居て氣象通報聞いて寢る

岩崎柳路、

ルンペンのあくちが痛い寒さなり
座が白け鹿兒島小原又歌ひ

○

岡田某人

相塲師の家では箸を拜む人
弟子のヘマ阿呆かといへばヘイといふ
働いてゐる身は避けぬ土埃
右正に請取られ候大晦日
うらゝかな日和乞食へ梅の塀
もうそこへ春が來てゐる灰を捨て
なんぞ卷くものがないかと豆の莢
あなたふとぬかるみに月搖れもせで

症狀へそうやそうやと風邪同志
わんたんへ今殺されて來た端役

耳を病む

耳を病めばのんびりとした返事が出

ある結婚者へ（二句）

どやされる覺悟新郎勤めへ出
さてもさても新婦へ赤い灯がともり

毛利九波

賴られて若き心のうろたえし
心許して女は微笑多くなり
しばし默せども人間味の無けれ
闇を行くに似る日ぞ靴の重きかな
清教徒たりしも戀の十五六
追憶の泡なり冬のビールなり
薄志輕才の話題の豐富さ
十八の心に痛し絃二郎
トーキーの消えたる闇の恐怖かな
窓の雨女妖精に似たるかな

福田浮鬼

戸籍嚴として養子なり
むづかしい弔辭となつて白けたり
出棺に身内の女卷煙草
肥へてゐる奴も癒らぬ面白さ
鶯の聲だ生きてゝよかつたね
嘘を云へさびしい奴が泣けるかい
さみしさをさびしむ僕に羽子の音
たゞ一人父の遺骨に舌をあて
自殺者の弱さは蟹にまで喰はれ

姫田夕鐘

大成駒屋を惜む

如月の舞臺は死出の旅となり

友の入營

送られる君たのもしい肩の巾
三笠山妻のバックに大きすぎ
拾圓持てばじゆうえんの友ができ
三下りに負けて上座は飲んでゐる

ふと見れば乳房は只の色ならず　後藤青兒

激情を刻んで上る梯子段
惡運は住居も替り名も改り
極寒へマスクの見本吊り下り
煙ばかりよく舞ひ上がる俸給日
濱職の嫌疑表札はづしたり
冬の日が戀しい窓の硝子拭く　朝田新水

過去と現在たゞ酒があるのみ
風采にほれても肴屋の匂ひ
正月を無事に暮したプロなるに
酒臭いなかに男がひかつてゐ
氣疲れの戀の幾日かはつゞき
まゐらせ候吾が身訴ふ署長様　喜多春秋

そんなに困つてゐたのかと間に合はず
敏感に神經質に線ほそし
子供らは何んにもつらいことがなし
臆病になつて大家で御座候
油繪の帶二十二の春である
姑は揃へ直して履くのなり　曾我部宵明

人きる程に磨いて肉屋は百匁きり
伐採へフトみ佛を思ふなり
激論の火箸底までつき通し
輕薄な女の齒莖見てしまふ
小說の戀を戀して嫁きおくれ
大理石權利と義務が相對し　水谷鮎美

おちつけば眼ばかりうごく君となり
冬の土母をおもはぬ日とてなき
ほうかむり凶作の地の晝の月
あたゝかき掌にくる雀となつてくれ
月の出をまてば笛さへなるものを

平井與三郎

口づけを避ける程度の倦怠期
タカラヅカ女給の帶の疲れてゐ
洗面所背後でをんな帶を締め
少年の心配風呂屋の避雷針
愛人の時計見る癖悲しかり

須崎　豆秋

ドロ〳〵と貧民窟へ陽が落ちる
寒鮒は身もちのまゝで煮つめられ
公衆電話あとがつかへるのろけやう

鳳治郎丈を悼む

天國の花道をゆく頬冠り

尼　綠之助

日さんの子供病む

よく死ぬる子を生み夫婦氣が弱し
行商のマスクは他國者の顏
入齒こつりとはまり言ふ事がない
お正月母のよろこぶ話する

竹內機見女

人につかれ事務につかれてトイレット
陽をおがむ前をゆらりとバスが過ぎ
佛飯をかしぐ手許のうすあかり
さてもさて幸福を追ふ角が立ち

西　いわを

教養の如何を問はず銀狐
常識の乏しき兄を店主とし
置炬燵旦那の部置を通り拔け
勳六等旭日章が前身さ

眞田　幸捐

我輩の齡を尋ねる得意先
勇退を餘儀なくされた地方官
魅力ある顏に手術を勸められ
勸誘の靴を揃へる女の子

吉田　水車

つれ〳〵の撥の重さを知る日なり
銀狐神通力はなかりけり

悼關大阪市長

思ひ出の其答辯も講義張り
玩具部で大人の方がよくならし　中澤濁水

魂に染む春雨の夢ごころ
式の順社長危くまた坐り
喫付けて來ただけ發車尻を見せ
此處が好いカメラは梅に突つぱられ　西村明珠

よい機嫌看の骨をせゝつてゐ
主義主張腹の立つ事ばかりにし
金持ちに會つては金の事云はず
御主人に酒をつがれて働らく氣　宮岡白峯

世話好きにされて淋しい秋の日よ
鍋の尻みたいに妻の達者かな
面會所國家有事の顏で合ひ
結局は金、金、金の地下足袋よ　市塲浚食子

無禮講まつてた樣にさわぎ出し
その上の不幸病氣で歸つて來
春の帶花粉をつけて歸るなり　明石柳次

灯を消せば何處やら寒い風が吹く
未亡人若く水仙花が好き
みん人にそむき南京豆を嚙み　石曾根民郎

肉汁をしぼる力は有てる父
母を想ひ弟におよび寢返るよ
いろまちに氷柱ありしも旅ごゝろ　江戸みつる

女への金の無心は捨てる氣よ
思ひ出は君病院で泣いた頃
貞操を守り續けて不倖　熊谷紅

養子やうやく後添と言ふものに觸れ

幻のごと病院を出るまひる
許婚それほどまでは惚れて居ず　荒井英賀夫

支那火鉢親子の膝が丸うなり
ぬくい飯眼鏡のくもるのも嬉し　植山九天

別府航路スミレ丸にて

ラヂオ今廣島局の沖と知る
男の子ほしい話で妻が酌み　岡崎祥月

平凡な暮しを皆にうらやまれ
人生を泣くななげくな懐手　首藤竹楓

經驗の有無を問はれた小さい窓
靜かなるみ姿如來煤けてゐ　町田承春

賣出しの町を追はれる樣にぬけ
空想の火鉢かゝへてはかなけれ

淋しさはふと鏡臺の前に座し　近藤勇

會つたうれしさへ別のせつなさよ　尾添好郎

老ひし母ざぶとんの上のありがたし
爆笑隊となりて春を歩まんかな　青木史呂

時は金なり麻雀をする　三鴨美笑

雜踏をのがれ財布の金を見る

粒々集

御影　長崎柳秀

よく叱る父のあるのを美まれ
慈善鍋良いことをした音になり
幸福な話男の子が産れ
凶作を知らず案山子の忠義振
春を待つばつかりの娘湯に浸り

武玉川二篇研究（一一）

梅本秋の屋
森東魚
蛭子省二

(343) 廣〳〵と物を思へと留守に置

省二＝枕と太平記でも與えられて居れば、廣々とひとり留守に居れる。

東魚＝言ひ廻し方が面白い。

秋の屋＝夫婦喧嘩をした果て、夫が馴染の女の處へ行くとて汝は一人空閨を守れといふのであると思ふ。

省二＝「物を思へ」には強い意味もあるから、唯事ではないのかもしれぬ。

東魚＝私は留守番に置かれる掛人などを想像したのである秋翁のお説も面白い。

(344) 坐頭の下駄の知れぬ皐雨

省二＝五月雨の頃、玄關番の座頭の下駄を、誰かがあやまつて履いていつたのであらうか。

東魚＝天氣續きの時なら、足駄があれば座頭だナと見當がつくが、五月雨頃はぬぎ捨てた下駄が、皆似たりよつたりで坐頭の下駄が、直ぐに見分けがつかぬと云ふのであらう。

秋の屋＝前説に贊成する。

(345) 大釜へ投込む薪のうはの空

省二＝いかに大釜であるかが判かる。大ボイラアへ石炭を投込むのでも、慣れつこで、うはの空でやるものだ。大釜はお寺の句に多い。

東魚＝のびやかな氣分が出てゐる。面白いと思ふ。

秋の屋＝大名邸か豪家の厨の光景である。

(346) 軒をはなれて杖の商

省二＝杖を賣るのに、家の前に出てついてみせる。

東魚＝俚言集覽に「杖つく」と云ふ項に、慶長見聞集を引證

して、六七年以來江戸で高きもいやしきも杖をつく、若き人達も炎天の道のよいにもつく。と云ふ事がみえる。さうすると前説のやうな事かもしれない。

秋の屋＝昔、餘情杖といふものを賣歩いたと、「畫證錄」に書いてあるが、此の行商は直に廢れたので、後世は絶えて無いものである。

省　二＝「二十前後より無益の竹杖」（永代藏）などとあり、昔は「杖」の論がなされたもの、「さらば杖の道理もひとしけるべし老年に至り腰屈みては、杖にて助らるゝのみなり。屈みたる腰は伸る事なし、若時より用ふれば、年老いても腰の屈る事は極て無かるべし」（理齋隨筆）等、珍説がある。前に御引用になつた慶長見聞集に、「桑の木は養生によしとて皆人このみければ、木こり爪木をこる者が、深山をわけて是れを尋ね、せなかにおひ馬につけて、江戸へ賣りに來る、當世のはやり物よせい道具なれはとて、若き人たちかひとりて」とあるから、兎まれ「杖の商」はあつた。

（347）　**江戸の起請を見せる島原**

東　魚＝京見物に行つた江戸者が、島原の太夫を見にいつて結局江戸自慢の揚句に、吉原の女の起請まで見せてしまつたと云ふのか。

秋の屋＝京見物に行く者が、遊女の起請を持參するのは、少し可笑く思はれる。これは吉原に居た遊女が、島原へ藏替をして、昔の馴染客の起請を看せるのであらう。

省　二＝兩説、いづれにも解し得られるが然し年中女の寫眞や髮の毛などを、懷にして居る色男もありはする。

東　魚＝守袋などに入れて、肌身はなさず、持つてゐそうに思ふ。

（348）　**小聲にて暇をさはく草り取**

東　魚＝「さはく」は「騷ぐ」か「捌く」か。主人を待つ間草履取同士が、戯談でも云ひ合つてゐるのであらうか。どうも充分解らぬ。

秋の屋＝草履取達が徒然の餘り、何箇でもして窺に騷ぐのであらう。何箇のことは後に述べる。

省　二＝「騷ぐ」である。「小聲」だから、何にかやつて居らう。

秋の屋＝騷ぐといつてもがや〳〵立騷ぐのではなくたゞ小聲で言爭ひでもするのであらう。

（349）　**關取の巾着に行若旦那**

東　魚＝相撲取をつれて得意で歩いてゐるのだが、外目からは腰巾着と云ふ態だと云ふのであらう。

秋の屋＝事實は關取の方が、若旦那の腰巾着である。

省　二＝然り。關取はよい巾着を持つたものだ。

（350）　**一日をきれいに歩行藁艸履**

東　魚＝藁は清らかなもの、新しくおろした草履を、其日一

日清らかな心持ちで、はき歩行と云ふので、神社へでも參つた氣持ちではあるまいか。

秋の屋＝此の主は婦人と想はれる。

省　二＝「きれいに歩行」は、普通の散歩でない事は察せらる。

東　魚＝「金砂子」に「一日をきれいに歩行ぞうり取」と云ふ句があつた。

秋の屋＝「武玉川」「金砂子」の兩書の内、何れか一方は剽窃句であると思ふ。

（351）　**鹿聞の都へ出ても耳か痩**

省　二＝鹿聞は餘程熱心に、聞耳をたててゐねばならぬ。だから都へ出てからも、何んとなく耳が敏感なのであらう「鹿聞の客窓あけてねせにけり」（也有）で、熟睡してしまふ事は許されぬ痩せたのは耳許りでない樣な氣もするかも知れぬ。

東　魚＝鹿の聲を聞かう〳〵と、夜も寢ずにきき耳を立つてゐたので、歸つても耳の痩せた思ひがあると云ふ心持。

秋の屋＝鹿の啼音は閑散なものであるから、それを山家で聞いて都へ歸つても、なほ耳に着いてゐて淋しい、といふのであらう。

（352）　**江戸見物の怖そふに寢**

省　二＝江戸は生馬の眼を抜くと云はる。「寢」が此句の含蓄

東　魚＝凡て目にふれ、耳にきくものが、驚異に値する事だらけで、宿に寢るにも、おど〳〵してゐる心持、面白い句と思ふ。

秋の屋＝田舍娘などの心理狀態は斯うであらう。

（353）　**河かつふれて亭の捨うり**

省　二＝亭あれば流があつて、景に成る河が潰れてしまつては、亭に趣がなくなる。始末を考へた末が捨賣。

東　魚＝出水の關係などで、川が變つてしまつて以前の眺めがなくなつたのであらう。

秋の屋＝是迄は眺望佳絶の川岸の亭も、洪水の爲に川の瀬が變つて、平凡の景となつた故、其亭を捨賣にするので、亭とはいへど懸茶屋の如きものであらう。

（354）　**默禮の中を流るゝ割下水**

省　二＝堀割を隔てて默禮。でも顏がみえるからよい。

東　魚＝知人と堀を隔てて默禮する。話かけるには一寸巾が廣い堀割である。この句も面白いと思ふ。和やかなユーモア味がある。

秋の屋＝この句は江戸時代に、御家人の住宅が多く有つた、本所割下水の實景と想はれる。

（355）　**三味線の次第に憎き年と成**

東　魚＝三味線も心憎いまで、彈きこなす年配の人物であらう。

秋の屋＝三絃が妙手になる年配だと、容貌の方が漸く衰へる

省　二＝「憎き」は巧みに用ひられた言葉だ。―もつと年老れば聽手になつた方がよい。

（356）

姉の礫の届く蓬生

東　魚　この句難解。姉の投じた礫は一石二鳥を得て、自分も立身し、里の實家も爲に浮び上つたと云ふやうな事かと思ふ

秋の屋＝古川柳には妾の兄が多く咏まれてゐるが、これは姉の方で難解であるが姉娘が結婚の夜に、村の若者等が礫を打つて祝ふので、それが蓬生の宿にとゞくのではない歟。

省　二＝結婚の場合と思ふ。

（357）

音のつめたい夜神樂の錢

東　魚＝夜神樂は冬の季題である。おひねりの錢の音がつめたく板敷に響といふ、冬の夜のさまであらう。錢を投げる事は「いな所へ當て笑ふ神樂堂」「ひねつてほうると一曲舞ふとかや」などで解かる。

秋の屋＝夜神樂の光景が、能く表現されてゐる。

省　二＝「夜神樂や鼻一白し面ンの内」（其角）で、以て全體の「つめたい」光景は判る。錢の音など一層つめたい感じが出よう。

（358）

くらひ心に智惠は借し損

東　魚＝悲觀しきつてゐる者に、色々忠告しても、一向受入れず、智惠を借しても無駄になつてしまうであらう。

秋の屋＝夢に三原山をさまよふ。

省　二＝猛烈な神經衰弱などに、智惠を與へてやつても其時丈け、直に氣がかはつてしまふ。

（359）

せきれいの尾のうこく筆癖

省　二＝文字を丁寧に書く人には、兎角筆癖があるものだ。その形容。

東　魚＝筆を下ろさうとして、筆を鶺鴒の尾のやうに、ピン〳〵動かす癖の人はよくある。私の父なども其仲間であつた。

秋の屋＝此の一癖は老人に多いやうである。

（360）

子心にさへ嫌ふ半襟

省　二＝なぜ嫌つたのか、前句關係であらう「子心にさへ」とあるなど、一層考へさせられるが。

東　魚＝前句の關係が嫌ふと云つたので、要は選り好みをすると云ふ意なのであらう。

秋の屋＝此の短句のみでは、何とも解し難い。

（361）

鏡賣日に成て女氣

省　二＝鏡は女には一日としてなくてはならぬ品だ。今や事情でそれを賣らねばならぬとなつては、覺悟はしたものの女氣の、惜しくもあり淋しくもある。

東　魚＝さて賣るとなると惜しくなるのは、女ばかりではな

からう。ましてや女がその魂とも思ふ鏡を手放す時に於てやである。面白い穿ち味の句である。

秋の屋＝感慨無量の體で、黒髪を截つて賣らうか、母より讓られた鏡を賣らうか、と暫時躊躇するのである。

（362）

衣〳〵に木辻の鹿を追廻し

省　二＝木辻は奈良の遊廓。鹿も朝が早い。又鹿はつきまとふ「鹿に文くはれ木辻のこぢよく泣き」

東　魚＝「追廻し」だから、多少鹿をおどして追ふ心持があらう。さては前夜はあまり當りがよくなかつたか。

秋　屋＝奈良人の早起は聞いてゐるが、鹿の早起はまだ聞かない。只其處等にゐる鹿を追廻すのである。

省　二＝「朝起の土地にねてゐる奈良の鹿」（古狂句）といふのがあつた。が、奈良の鹿も朝早くから出掛けてきたものではなからうか。

（363）

揚屋てつらのにくい伽羅利

東　魚＝ふむ、こりや芝舟じやな、なんて通ぶるのは揚屋でいつそ、いやがられると云ふのであらう。洒落本の一節にありさうである。

秋の屋＝髭の意休のやうに、伽羅臭い奴であらう。

省　二＝現代なら西洋かぶれの、香水利か。

（364）

鶯や我罔雨に啼ならひ

東　魚＝罔雨は何處へ寫るのであらうか。まだ紙袋を被つてゐる籠の日ざしをうけて、其紙袋へ影がうつるのであらうか。兎に角わが影を友鳥の如く思ひあやまつて、愈々啼き習ふとの意であらう。

秋の屋＝前解は適切のやうである。

省　二＝紙袋にて可ならむ。障子では「鶯や障子におのがふりをみる」（青藍）と。鶯は聲と姿が大切である。

（365）

舞子の親の橋へ來て居

東　魚＝わが子の美しい姿をみたく、四條の橋あたりへ來てゐるといふのであらうか。

秋の屋＝四條河原の夜涼に吾子の姿を餘所ながらみるので、そこに哀れがこもつてゐる。

省　二＝見たくもあり、又氣がとがめるやうでもあり、そこを橋まで來て居るのが親の情。

（366）

椀へなみたのかゝる松山

東　魚＝椀久を忘れ難く、椀をみても松山は涙をしぼつたらう、と云ふ想像的の意であらう。

秋の屋＝昔は總て磁器を碗と稱へたもので、有名の椀久も磁器商である。この「椀へ涙のかゝる」は、作りすぎて面白くない。

省　二＝椀屋久兵衛は豪商であつたが、新川の松山に馴染み遂に一身を亡ぼす。一中に椀久末松山などがある。

(367) 鳴なから身を振ほとく朝烏

省二＝前句がないと適切な感が浮ばぬ。朝烏だから、中七の身ぶるひするのを、特に點出したのか。

東魚＝身を振ほどくとは、羽ばたきを心地よくする、意味合ひであらうか。

秋の屋＝これは寒夜に鷹に摑まれた、所謂溫め鳥を咏んだもので、翌朝放釋されて身を顫りほどくのである。

(368) 南湖の銭の一兩はなし

省二＝南湖の所在は「梅澤と南湖の間の秋のくれ」で判るさるにても「似ぬ役者畵て南湖の紙幟」も確心し得る解が出來す、此の一兩はなしとは。茶屋で使つたのであらうか。

東魚＝俳諧所名集には「南湖茶屋あり」とだけある。茅ケ崎八景の中に南湖の晴嵐がある。句意はよく解らぬ。

秋の屋＝南湖は地名でなく「何箇」の當字で、これは數人打寄つて、各自掌中に錢を握り、それを前に出して、互に其合計何錢なるかをいひ、而してそれを言ひ當てた者を勝と定めて、其錢を採る賭博の一種である。

省屋＝何箇ですか。とは全く氣附かざりし。何箇の事嬉遊笑覽卷四に詳し。

東魚＝何箇とも考へたが、うつかり小供の遊びと斗り思つてゐたので……成程、あたじけない賭事の心持ちとみるべきであつた。

(369) むすめに智惠を付る雷

省二＝雷鳴に蚊帳の中へ逃込む。娘にある智惠のつく機會かもしれぬ。

東魚＝雷は柄になく粋なものである。

秋の屋＝昔の小說や演劇の好材料である。

(370) 金剛杖てありく闇の夜

省二＝修驗者も月の夜を歩くのは、心地がよからう。然し「金剛杖」に對しては、「闇の夜」が、うつてつけの樣な氣もする。苦修練行一倍だ。

東魚＝大震災當時の夜警に、金剛杖をついて歩いた思出がある。

秋の屋＝峰入の修驗者を咏むだ句であらう。

(371) ひたるい猿の桃色に成

東魚＝空腹になつて人間なら靑める處を眞赤な顏の猿の事だから、まあ桃色位になると云ふ可笑味。

秋の屋＝少しくすぐりの句で、詩味が缺けてゐる。

省二＝獨立句としては、つまらぬ。前句事情で桃色などが言ひたかつたのかもしれぬ。

雜筆春秋

鴈治郎

食滿南北

名人氣質の鴈治郎を傳へたのは多く私である。しかし、それはあまりにもその人を名人氣質といふ一種の「イガタ」へはめてしまつた。

さうして私は「常識的鴈治郎」或は「人間鴈治郎」を傳へなかつた。

歿後私はそれを傳へる事にこれ努めてゐる。

シルバー、シドニーを識つてゐた故人、ヤニングスの映畫によつて工風した故人。

さうして私へ來た手紙によつて文章家であつた事をも傳へたい。

其手紙はかう云ふのである。

あまり心ならず候ゆへ鳥渡此より申入まゐらせ候御ぶじのよし何よりもめで度ぞんじ候、御元樣はじめ悴一長三郎一其外御一統さんめ一〳〵御いそがしき事と察し申候

此方も最早上京近々に相成何事も手につかず世話敷事に御座候いよ〳〵二十五日千秋樂には候へ共尙々見物も宜敷明日は賣切に御座候、しかし御地の人氣はどふですか、それのみあんじて居り外。市中の景氣をきかして下さい。此方の芝居がゝりの人々みな〳〵東京へ行きたいと申者ばかり猶また此方五六日前より、雨天にてよほど寒く、それ故小生風邪にてよわりおり候、本日はよほど氣分宜敷候へば鳥渡御たづね致し候

林

南北大人

皆々御苦勞〳〵上京の上は御禮はやらん、六兵衛茶碗、二十一日はたしかとのこと

お禮はやらんと云ふ處如何にも面白し。

中程で言文一致になつてゐるところ

△長崎柳秀氏は 大阪帝大醫學部學友會報別冊として「川柳談」を著されました。

△八薙刀郎君は 今般大日本武德會劍道四段に列せられました。

△天野卜居君は 去る一月二十八日目出度華燭の典を擧げられました。

△阿部佐保蘭君は 高橋渡氏夫妻の媒酌に依り二月五日乃木神社に於て 西見千代子孃と神前結婚の祝典を擧げられました、同時に本名潔を潔志千代子を圭子と 改名されました。

△酒井小樓君は 二月八日松山に遊ばれました。

更ける夜の大街道に醉ふた客

△福田丁路君は 二月十三日非常時日本の認識は空よりと飛行機で松山へ向ひ 道後溫泉に入湯されました。

△海野夢一佛君は 昨春二月以來「川柳史」並

など如何にも故人らしく、しかも封筒には菊月二十二日夜とあるところも亦役者らしい。

非常識のやうに云ひ觸らしたのは、叱られた人達の意趣返しであつたかもしれない。

無論私は「名人氣質」として傳へたのではあつたが……

夢——酒

不朽洞

藥學博士の木村彦右衛門さんが死ぬ前に、儂が死んだら、ワグナーの葬送曲で式をやつてくれと遺言をされたさうだが、人間は死んでから後の夢まで樂しむ者である。

×

編輯室で、葭乃が寒うおまんなアと火鉢を抱えてゐる。

酒でも呑んだらどや、手をたたけと料理屋のやうなことを僕がいふ。

洋酒は食慾を增すと新聞に出てゐましたと、某人君がいふ。

確に食慾を增しますと與三郎君がこれに和した。

確に食慾を增しまんなアと葭乃が同んなじ言葉を繰り返へした。

さうだ確に食慾を增すと僕も思はず言葉を繰返へしたので、四人が顏を見合はしてうれしさうに笑つた。

女といふもの

麻生葭乃

光耀會の句會はいつも寄りが惡るい今日も機見女さんと二人きりだ。何をやつても女は駄目だなあ、なさけない事だ。青柳有美さんに云はせたら、女は猿に毛が一本半多いだけださうなが光耀會の案內狀は毎月少なくとも四十枚位は機見女さんの御厄介になるのだ四十匹の猿が居つたら、句會へ集る眞似事位、わけもなくやつてのけるだらう。考へると女は猿に毛が一本半少ないのかも知れない。

に「川柳辭彙」完成に努力されてゐました處、先般「川柳史講話」を完成刊行される事となりました。

△大每二月十四日紙上に「番町皿屋敷其他」を木村小太郎君が執筆されました。

△大每二月十五日紙上ちぐざく問答に「女秀輯中村芳子」と題し路郎主幹が執筆されました。

△サンデー每日二月十七日紙上へ「鴈治郎を偲ぶ」「川柳にのこる中村鴈治郎」を岸本水府氏、「鴈治郎の逸話」を食滿南北氏が執筆されました。

△食滿南北氏は淸交社午餐會に「名優鴈治郎を語る」と題し講演されました。

△東北川柳(福島)二月號を同人蓮沼九光氏の追悼號とされた。

△川柳街(京都)は一、二月の合併號を發行されました。

△川柳へちま會奧町支部初顏合せの席上より寄書を頂きました。(五日)

△本社今治支部の舊正月句會席上より寄書を頂きました。(六日)

△加能川柳社の梅鉢二月句會席上より寄書を頂きました。(九日)

△柳風會の玄々閣句會の席上より寄書を頂

自由律異變

須崎豆秋

私が一年志願兵の時、小隊の實兵指揮をやらされました。教官から狀況を與へられます。

「正面に有力なる敵の歩兵が現はれた……右の丘からも機關銃が射擊する……志願兵！どうしたらいゝか」

「前からも、丘からも彈が盛んに飛んでくる、さア志願兵！どうする〳〵」

私は、紅しようがのやうな顏をしてとつさに大きい聲で「兎に角前へ―」といふ自由律の珍號令をかけ、全線の兵隊をドツと笑はしてしまつたので、此の演習はさつぱりオヂヤンになりました。

彼岸の感想

岡田某人

あり合はせた紙の端に――春のお彼岸――と書いて、さてじつと目をつむつてみると、第一に浮んで來るのは、天王寺邊の、正確に云ふと、惠比須町から西門へ行く電車線路に沿つたあの通りの風景である。そしてその風景といふのが、春の彼岸の、お詣りの雜踏に、かてゝ加へて、祭日に子供を連れて天王寺公園にまで出て來た家族連れが交つて、恐ろしく雜然騷然とした人波の、中を、やゝ時代はづれなやかましさとロースピードとで往つたり來たりする電車の音も加つて、それは、賑はひといふよりもざはめきの方に近い落着かなさの風景であり、一面に立ちのぼつてゐる、春特有のあの黃色つぽい埃の中に、軒並みの經木屋の、經木の香、線香類の匂ひが入りまじつて、たゞさへ疲れやすい春の神經をいやが上にもうんざりさせる。しかも家々軒々の、ぼんやりとした陽をあびた列と

きました。(十日)

△神戸川柳あけび第一回紀念句會席上より寄書を頂きました。(十一日)

△今里支部幹事は吉田水車君が就任されました。

△阪大川柳會の山彥君(關根博士)は歐米見學の爲め三月二十三日神戸出帆の照國丸で洋行せられました。

△その晩路郎主幹は御影の柳秀氏邸を訪問され川柳談に夜を更されました。

△富士野鞍馬君は二月七日歌舞伎座で森赫子の後援會を、廿日は明治座に森律子の後援會を催されました

轉居

△海野夢一佛君は(東京市下谷區入谷町百二十四番地)

△福永泰典君は(京都市堀川通寺之內上ル三丁目上天神町)

△丸橋松雨君は(大阪市西淀川區大和田町五七四)

△高須啞三昧君は(東京市蒲田區女塚町一三七)と番地變更

△永先芽十君は(大阪市旭區生江町五九三)

いふものが、まるで、古道具屋の店前にならべ立てられて、埃まみれになつてゐるがらくたを見る時の樣なとりとめのない並び樣で、あの時分にあの通りを通つてゐると、實にわびしい、やりきれなさを感じるのであるが、それといふのもあるひは其處を二三度通つたことのある僕は、きまつた樣に近親の誰かの骨を納めにあの輕いやうなそれでゐて何か重大な氣持ちを強ひられる小つぽけな筥をもつてゐたためなのかも知れない。

近親、つまり母、父、兄の順序で、四五年のあひだにばたばたと死なれた僕は、一體に世間的なことをあまり知らなさすぎたために、そもそもあの骨といふものをどうしたらいゝのかも知らないで、うろ〳〵したものであつた母の場合は、故郷の街を見トろす山の上の寺に土葬したのだから、問題はなかつたけれど、父の時には、兄がすぐさま働き口を探しに遠方へ行つたりしたので、僕が何とかしなければならず お寺の名前だけは近所で教へてもらつたものゝ、その一心寺といふのが何處にあるのか判らなくつて弱つたものであつた。兄の時は、前のことがあるために、まづうろたへはしなかつたとはいへ、仲々あそこまで出かけて行く氣持ちといふものが出なかつたのであつた。それといふのが、ぶちまけて云へば、僕の出無精もあつたが、それよりももつと重大なことは、そんな、お寺へ行つて、お經をよんでもらつてゐるあひだ、さも神妙さうに膝を折つてゐなくてはならぬといふことの方が、僕を憂鬱にさせ、おいそれとそこへやらなかつた原因なのだ。

△磯部孔雀君は（山口縣熊毛郡寶積東の庄二三一五）

改號

△安田青陽君は（碧園）

本社三月例會

日時 三月六日（水）午後六時

場所 川柳雜誌社會館

兼題 「醉醒」三句　路郎選

講演 「川柳の形式に就いて」　山雨樓

會費　三〇SEN

早春の氣配を感じ乍ら一夜本社の靜かな廣間で、私達は作句の陶醉境を得ようではありませんか！

新人の方の出席を期待致します。

○上汐町一丁目の本社事務所は上汐町四丁目バス停留所を西へ約一丁、始めの四ッ辻を南に折れると左に見える洋館

TYPHOON以後

住田亂耽

思ひ出しても、ぞつとする颱風襲來の九月二十一日――以來半年も經過したいまごろあのころの事を思ひ浮べてゐるのは、はなはだ手おくれの感じがするのだが、相當僕らを試錬してくれたTYPHOON君に今となつてはむしろ感謝しながら、そのころ及びそれ以後の出來事で、心の隅の何處かに殘つてゐるものを二三拾ひ集めてこゝに錄する。

―ラ　ヂ　オ―

物凄い大津浪の爲に階下の家財道具はすくなからぬダミツヂを蒙つたが、そのうち之はだいぶ後に氣づいたのだが、地袋の中に入れてあつたラヂオの受信機も完全にその性能を奪はれてしまつてゐた。

然し、生活直接に影響のあるものゝ復舊に懸命であつた際のことゝて、當時はラヂオの存在なんか全く忘却してゝゐたのであつたが、ものゝ一月も經つて、そこここゝがおさまつてくると、夜などは一しほラヂオのならぬ町並の寂寥さがひし〳〵感ぜられてきた。

日の丸のめしに澤庵の菜、夜はほそ〴〵とした蠟燭の灯をたよりに、莚の上で寢てゐなければならぬ時の氣分で居れば、人間萬事無事な事は、オプ・コースだが、僕如き甚しい得手勝手な人間は、一より二、二より三とより高く、より豊かな生活を、自分の力の許す限り望むもので、災後暫時にして、既にラヂオを生活の一部にとり入れたい切なる欲望に驅られた。

かれ〴〵むしろ輕蔑さへしてゐたラヂオも、さてしばらくきゝ得ないといふ狀態におかれると、全く骨身にこたへる程の淋しさを感じるもので、新聞と同じく最早僕の生活へ深く浸潤した存在であることを颱風によつて初めて敎へられた。

日常、新聞なんてものは、一寸目を通すだけで、あるひは幾日もよまぬ日が續いても、たゞそれがまちがひなく毎日家へ來てゐるといふことで、何かこう心安かな氣持をもつて、その日その日を過すのだが、ラヂオにもまた之と同じやう氣持で對してゐて、スヰッチを入れゝば何時でもきけるといふ、まことにおほびらな態度で、いつでもきかずにすましてゐただけのことで、さて新聞の來ぬ日は何か物忘れした淋しいものである如く、わが家のラヂオが無機能なのを はつきり知ることはまことに侘しいものである。

ふだん心安くしてゐるラヂオ屋といふのが、至つてルーズな男で、僕のラヂオなんか我れ關せずといつたかたちで、早速と修理してくれなかつたので、この僕の電波思慕の念は一層病的になり、はては狂的になつて、ラヂオ屋の顏を見る度に大聲叱咤したものだが、彼氏またいやに落ちついてゐて、僕の叱言など馬耳東風に、じんぜん日をのばして、極月も押しつまつてから、やうやく復舊工作を完成してくれたが、わが家の擴聲機から、實に久方ぶりに、電波が流れてきた時は、思はずブラボーを叫び、今迄のうらみつらみは途端に何處かへ放擲して、憎むべきラヂオ屋とついうつかり握手をしてしまつた。それからしばらくは「金屬性の嫌な音を出しやあ

がる」とか色々苦情を持ち出さずに、かつて幼稚園で先生のオルガンを、手をきちんと膝においてきいてゐたやうに、神妙に、おとなしく擴聲機の前に坐つたものである。

―いもんひん後日譚―

災害に對する各地の御同情が、翕然とあつまつて、つきあひ下手な僕にさへも、多くの柳人から、罐詰や衣類がとゞけられてきて、その御厚意には全く動かされた。雀郎、花川洞、琴莊、玄六、玉兎朗といつた東都五人組からは、「川柳慰問だるま」といふ手のこんだものを送られて、ほんとに慰められたが、それにあやかつてか、漸く起き上り得た自分をかへりみては、時々あのむつかしい表情の達磨君を掌にのせて、常時を撫然と思ひ起すことである。

以下は先日上京して判明した事であるがJACKさんから僕に送られてきた罐詰は實は家族の方の誤送で、僕ん所へは着物を送る筈であつたといふ話をきいて大笑ひだつたが、その着物といふのが、Kといふ大阪の柳人へ屆き、その人から、今度上京する時はそれを着て參りますといふ手紙さへ行つてゐるさうである こゝに今もつとも僕の氣がかりなのは、Kさんと僕が親子程も年齢がちがつてゐる事實である。また身長が、僕の長身に比べて、彼氏が特に倭軀であることである。

とにかく、僕はKさんが、Jさんから送られた着物をきた姿を是非一度見たいものだと念願してゐる。

―ロ　マ　ン―

唐突に「ロマン」と書くと、何のことだかさつぱりわからない人が多いと思ふが、之は東念寺和尚こと玉兎朗氏の愛犬の名である。

舊臘東念寺夫人の死は、颱風以上、まさに僕の胸をうつた。夫人から受けた恩を幾分かでも返せれば幸甚、いふ氣で、一月末日、東上して、やうやくおとむらひの席に列して、僕はホッとした。

その日、東念寺を、かなしくもうるはしくデコレートした東都柳壇の人々を思ひ泛べて、今また僕はあらたな感激にうたれる。

さて「ロマン」のことであるが――

夫人の遺骸を納棺する時、柳人の誰かゞ、「ロマン、お前もいゝ年だから、この中へ一緒に入つて行けよ」といつたら、そのときまで、いゝこゝろもちでねむつてゐた「ロマン」がむく〳〵と起き上つて かなしくそつぽを向いたさうである。思ふに東念寺生活久しき間に「ロマン」は、こゝへ謂集する川柳家の毒舌を解するやうになつたのであらう 今はほんとに老ひさらばつてとぼん〳〵とした犬であるが、以前は行儀もよく、とてもかしこい犬だつたさうである。

僕は「ロマン」をみると、何となく、ほんとに何となく、久良伎さんを思ひ起すのである「ロマンなど、これだけ生きてればさしづめ川柳界なら九段老人といふ格ですれ」、といふ風な會話を交して玉さんといつか笑ひあつた。

久良伎老が、かつて東念寺を訪れた時、この「ロマン」に大枚五十錢をなげうつて、洋食を奢つたといふ美談がある。その時玉さんに銀貨を渡して「之でこの犬に洋食をくはしてやつてくれ」といふんで、何時でもよからうとその儘にしばらく放つてゐると、「是非とも俺の目の前でくはしてくれ」と頑張られて漸々立つて洋食屋へ行つたさうであるが、あの物事をおつくうがる玉さんのその時の後姿は確かに微苦笑に價ひするものであつたらうと思ふ。

さはあれ、犬仲間多しと雖も、久良伎老に洋食をおごつてもらつた犬は、さう澤山ゐないだらう。

「ロマン」また以て光榮となすべし――か

（一〇、二、四）

本月二月例會

二月六日夜　於本社事務所

この月の例會は、街の高臺である本社事務所階上の日本間で開いた雑音の届かぬ靜かな雰圍氣で膝つき合はせたなごやかな句會であつた。

路郎主幹から「或る小説の話」と題する興味深い講演があり、みんな唾をのみ乍ら傾聽した。

會場不案内の方もあつたと見えて集りの少かつたことは遺憾であつた。

（出席者）路郎主幹、雨迷、史呂、柳笑、かほる、つとむ、天國、おさむ、變人、世間音、夢裡、緣雨、新水、山雨樓、白柳子、靜波　ライト、一三、彩泡、與三郎、禿山、九波夕鐘、萬よし、豆秋、清美、みつる、汀柳、丹路、翠夢。

席題　愛　互選、與三郎披講

代數の丙へ母子の夜が更ける　萬よし
愛と云ふ字が氣にかゝる十五六　九波
賣笑婦歪み〻愛の中に居る　おさむ
母の愛子の愛寒さ慰める　柳笑
愛のある女中机の下を掃き　かほる
愛の結晶日本を離れ　新水
愛なんかどうでも好いと女給醉ひ　同
愛し合ふことに食堂から電話　同
熱愛の結果を亭主詫びるなり　禿山
皆の愛たつた一人の男の兒　同
兩親の愛が娘を走らせる　世間音
愛されてゐて小遣に不自由する　同
愛の涙やはらかい涙なり　天國
曳かれゆく身へ眞實の愛を見せ　柳笑
灯の下偶りの愛にされ　かほる
愛の巣へ遙々父はやつて來る　ライト
父の愛何處にあるのかなと思ひ　同
母性愛おむつを洗ふ手が凍え　白柳子
淋しき愛でマントをたゝむ　同
愛人と來てデパートの窮屈さ　山雨樓
愛人と趣味が合つてる乘馬服　同
國際愛雜誌は派手に戴せるなり　彩泡
愛人に會えて話題が見付からず　同
繊多きハトロンの中に母の愛　つとむ
愛すればこそかんてきの火を起し　夕鐘

席題　伊達卷　かほる選

白粉の手で伊達卷を締め直し　ライト
伊達卷で別れ話に強く居る　愛人
伊達卷のまゝで蕎麥屋へ走つて來　新水
伊達卷は朝をすまを起きて來る　柳笑
伊達卷へ向ひの二階開けてゐる　夕鐘
考へがついたが伊達卷締め直し　與三郎
伊達卷とホテルの廊下ですれ違ひ　同
伊達卷の女優綻び縫ふて居る　万よし
伊達卷へ女の細さ親しまれ　おさむ
伊達卷の姿下男に見付けられ　緣雨

席題　老優　夕鐘選

老優の舞臺の型を寄席で知り　夢裡

老ひ込んだ身體と別に藝は生き　清美
年齢と別に二枚目の華やかさ　同
老優の鼻がけわしくなつてくる　山雨樓
老優の好みに合ふてゐる豆腐　かほる
老優の部屋へエレヴエーターが出來　同
老優も獨り歩けば只の人　史呂
老優のある日の夢は記事となり　彩泡
老優が滑りこけまいかと思ひ　綠雨
老優へ酷たらしい役がつき　變人
老優の鎧を脱がす五六人　豆秋
老優へ舞臺は寒い役どころ　變人
老優の辯は辯とて美化される　万よし
老優の話舞臺が廻るなり　夢裡
十次郎の役に七十の阪を越し　新水
老優が逝いて樽の灯が暗し　世聞音
關西の梨園に惜しい花が散り　彩泡
國寶の樣に老優の死を惜しみ　柳笑
舞臺では不老の鷹も消えてゆき　つとむ

悼鷹次郎

デスマスク紙治に似てる眼かつむ　白柳子
(軸)河庄へかかる治兵衛が死んでゐる　夕鐘

席題　市長　万よし選

市長といふ立場の太い腕を組み　變人
先頭へ市長うや〳〵しく進み　ライト
市長と云ふこと忘れず酒を呑み　變人

くつろげは市長碁相手欲しいな　史呂
大都市にすると市長は顎をなで　おさむ
市長室がらんとしてゝ氣が怖け　白柳子
老映が市長としてのやはらか味　山雨樓
大阪のきつねうどんを市長賞め　かほる
サイレン(市長時計を合はしとき　山雨樓
市長今旗行列へこみ上る　同
小市民市長の事は考へず　清美
再選の市長袴を縫ひ替へる　いわを
宴會に市長の席が空いてゐる　同
大阪の煙市長へ燒香する　天國
朝風呂は市長を悼む聲ばかり　豆秋
市長さん書きたいことも書かず逝き　世聞音
死んでから名市長など云はれ　みつる
ぼつくり折れた輕りのみをつくし　白柳子
地下鐵へ當時の市長偲ばれる　新水
外國の例で市長は切り拔ける　路郎
市廳舍を出ると不肖の子を思ひ　同
(軸)酒落一つ云はず死ぬ名市長　萬よし

席題　炬燵　雨迷選

炬燵から見る燈明の眠たさう　山雨樓
炬燵から夜が明けた頃猫が出る　同
煮え切らぬ返事炬燵は叱られる　彩泡
珍客の炬燵の襦へ子を寢かせ　白柳子
花札に炬燵の隅が空いてくる　同
土産物炬燵の子供首を出し　天國

友禪をかけて炬燵も歌になり　清美
炬燵から何か云はんとして動き　綠雨
炬燵の溫みじみと知る五十年　九波
(地)炬燵から踊りの振を付けて　豆秋
(人)炬燵に入つても一人寢のうつ　みつる

信濃行吟

(天)炬燵から淺間は雪と敎へられ　万よし

席題　足並　路郎選

足並は亂れてゐても手をつなぎ　一三
足並の方より顏に氣を取られ　世間音
足並が揃ふて端は笛を吹く　つとむ
居留地で巨人へ足並揃へて見　夕鐘
足並は兵舍へ歸る響なり　九波
窓を明けてちつと足並に醉ふ　雨迷
足並が揃ひゆつくり眼鏡ふく　變人
足並に割勘のこと胸に持ち　白柳子
オルガに合ふ足並は圓くなり　山雨樓
小走りに妻足並を合はしてる　清美
足並も輕く職業線に立ち　同
突風に追はれ足並小さくなり　天國
足並が亂れたとこで書にする　同
足並を揃へて心齋橋更ける　新水
足並へ鍵はちやらつくばかり　鮎美
足並を牛が待つてゐる交叉點　一志
(人)人妻の足並揃へねぎを提げ　かほる
(地)足並を亂しておいて振り向き　變人
(天)沈默へ足並ばかりよく揃ひ　靜波
(軸)足並を亂す一人に社長の子　路郎

柳壇雜俎

福田山雨樓

○

「川柳人」二月號で鶴彬氏が定型律再批判を論じてゐる。自由律川柳を進歩的な必然的過程となして、熱中してゐたが、さて振返つて見ると定型律の堅壘は一歩も拔けてゐない、これは定型律から出直してかゝらねば駄目だと覺つたのだ。海にさへ飛び込めば泳げるものと思つて溺れかけた若者が、蛙泳ぎから習ひ始めるといつた姿だが、そこに着目したことは偉い。曾て本誌に掲載された雀郎氏の、「十七字への惧れ」を讀めばも一つよくわかる。

○

「さやり」二月號の「柳壇ワキ役月旦」は面白かつた。これは斯る意表的な觀察と登場せしめた人物の粒揃ひにも依るが、東都柳壇の動向に就いて考へさゝれるものが多分にあつたからだ。結局柳壇の改革も刷新もシテ、ワキの緊密なコンビと不拔の氣魄とが續かなくては出來ぬ相談だ。

そして謠曲には地謠があるが、これは柳壇人の總意と云つたもの。これをリードする地頭の責任も亦決して輕くない。柳壇人物論を翹望する所以。

○

「むさしの」二月號に摩耶火氏が「議論屋に轉向する」＝古句月評＝を書いてゐる。又同氏は「手」の二月號でも「古句研究を中心として偶感一束」を述べてゐるが、その正義感と云ふか學究的態度と云ふか、科學者に見るやうな律義さが紙面に溢れてゐる。これは蛭子氏などの態度にもよく感ぜられることであるが尊敬に價する。

眞摯なる古句研究家の努力に對して、聲援と、感謝と、優遇とを捧げることは無論柳壇の義務だ。仮令次の時代の古句研究家の仕事がなくなるほど、現代の古句研究が完成されるとしても。

○

「芥子粒」二月號で「川柳即生活の意義＝人道主義主張の辯＝」と題する丘翁氏の言說には、贊成である。殊に「人間生活は如何なる生活を差して人道的であるかを、はつきり識別し得ると共に、其の氣持ちをもつて表現し得る短文學は川柳の外は無い」と喝破するあたりの意氣を喜ぶ。

人道主義と云へば儒教的な、或ひは無抵抗主義めいたものを感ぜられぬでもないが、そんな諦觀的、逃避的なものでなくて、丘翁氏も言ふが如く、もつと逞ましい文學精神を基調とする人道主義でなくてはならぬ。

○

「ふあゝすと」二月號に石川樂郎氏が「殼を破つて」の中に「雜俳的精神と句會川柳」と題し、句會に指導精神がないとか、句會では雜俳的川柳のみが選ばれてゐるとか言つてゐるのは、一面の傾向を論難した點は是とするが、認識不足である。それよりも懸念することは、句會輕視の傾向である。句會の惡い或ひは濁つた方面のみに氣が付いて、句會のよき性能と機關とを見逃し延いて句會を嫌忌するが如きは思はざるの甚しきものだ。

○

「川柳街」では以前から同人創作欄の自選制を行つてゐる。自選必ずしもうぬぼれ選ではないが、特異性のある句（內容表現何れにしても）程批判性を多分に要求するものであるから、自選發表は出來得る限り避くべきだ。殊に同誌では先輩松窓氏健在の折柄であるから、その自選制は頗る腑に落ちないものがあると云はなければならぬ。

○

「番傘」二月號に久良伎翁の「江戸の趣味」が載る。相も變らず綜合の美感だの低徊味の江戸氣分だの、社交の尊重だのと御題目を唱えてゐられるが、懷古癖も此處まで嵩じると徹底したものだ。

それほど迄に江戸の趣味に陶醉したいのであれば、川柳なんかさておいて選ぶべき道は他にいくらでもあると思ふ。江戸の趣味が難有さに、現代の川柳と云ふものを頭から問題にしないやうな久良伎翁は、取り殘されたつて仕方があるまい。

○

その久良伎翁から、僕は最近二十數葉にわたる信書を頂いて恐れ入つた。洵々と社交、美感、東洋哲學、綜合氣分感、川柳協調感等々を繰り返し〳〵諭されたのであるが、どんなに心をとり直して見ても翁の所說がのみ込めなかつた。翁は僕が句會で鐵道の制服を着てゐたから、彼奴は川柳のわからぬ奴だと思はれたとのことであるが、そのくせ僕は翁が好む邦樂の內で謠曲を十年來嚙つてゐるし、書道の方も最近手習してゐるのだから、器質的にもちつとは翁のお流れを汲めさうなものだが一向駄目である。

そこで思つた。翁は僕達のことを唯我獨尊の我利々々盲者と云はれるが、翁こそ唯我獨尊の張本人ではないかと。

○

更に沈思したことは、現柳壇の元老であり恩師である久良伎翁が、何故あんなに頑迷固陋で、現代作家を嫌忌され排斥されるのであらうか、と云ふ疑問である。歌壇の信綱、薫園、俳壇の青々、虛子、鬼城と云つた諸家が、老來尙且つ中堅新進となく相交り、その敬仰尊崇の的となつて、夫れ〳〵寄與貢獻されてゐる現狀に比して、伎翁が柳壇に對せらるゝ態度の如何に偏狹であり、否定的であるかを思ひ至るとき、假りに柳壇が伎翁を遇するの道に缺ぐるところあるにもせよ、餘りに遺憾事ではないかと痛嘆せざるを得ない。

○

久良伎翁に信書を貰つたり、原稿を寄せられたり、半折を惠まれたりすることは、吟社柳人のよろこびに違ひない。しかしハガキ一本でも慈母の如き同情と、師父の理解さへあれば、若者の胸はおどり、新人の歸趨は定まるのである。

柳壇が先輩を見放しても、先輩は柳壇を見きはめねばならぬと思ふ。

路標

募集句

工場

山本雨迷選

油きす箇所が光つた工場の灯　天國
工場の擴さが月に濡れてゐる宵明　單純な氣持工場の隅にゐる敏　懷疑派の一人工場の隅にゐる文庫　アメリカの音を工場させるなり曉童　煙草の輪工場の窓は晴れてゐる世香　工場に支配されてゐる街つゞき草樓　佳

栖一つ越えて工場の灯が暗らし　水客

青春を喰つて工場の無表情　沐天
工場地帶朝霧動く辨當箱　葉魚
工場引ける塲末の夕雲かなし　新市街
女工を吸ひ込んだ鐵扉の鋲、鋲　有爲郎
(人)工場の窓を掠めて汽車走る　春光
(地)工場は地靄煙突は冬空をもて、　好郎
(天)サイレンの音に工場の持つ欠伸　久米雄
(軸)夜業の影冷え〳〵工場に土塊か

商人

朝田新水選

主義もなく商人として成功し　文庫
商の値にあきれ商人たゞ默し　世香
デパートの對策をねる小商人　利生
商人の懸引にある眼の動き　いの助
儲からぬ話で笑ふ問屋街　嵜喜固藍
商人の手を經て物價高くなり　一服
白足袋の商人らしい才を見せ　三碧
當然のやうに商人嘘をつき　菊路

川柳家戸籍調（續）

（係）　緣雨

（1）姓名（2）雅號及別號（3）生年月日（4）出生地　5）現住所（6）職業又は勤務先（7）好きな句（8）自信の句（9）川柳以外の趣味（10）配偶者及子供の有無（11）嫌ひなもの（12）川柳に手を染めた年月

（412）　小池蛇太郎

（1）小池庄作（2）川柳蛇太郎、俳號紫傘人（3）明治二十五年二月二十一日（4）長野縣長野市（5）東京市中野區新井町四七（6）陸軍の小役（7）五十鈴川濁らず二千五百年（劍花坊）どう坐り直してみてもわが姿（信子）（8　將來は知らず今までに無し（9）映畫、演劇、旅行（10）妻、子一人（11）オベッカを使ふやつ、大家を氣取るやつ、女みたいな感情家（12）昭和四年七月

（413）　尾山兎耳

（1）尾山藤二（2）兎耳、幽香亭（3）明治廿九年五月廿四日（4）石川縣金石（5）東京中野區大和町三八九（6）三越本店（7）江戸中を越後屋にして虹がふき（古句）緋撫子お七を燒いた原に咲き（劍花坊）（8）縫ひ上げてしみ〴〵秋の聲をきゝ、猪口一つそれも世間に教へられ（9）書とゴルフ（10）妻有、二男一女（11）排他主義、男

商人の夢安東で破られる　宵明
商人の氣に向く新流行となり　源一
景氣よい聲で商賣人の春　綠水
小商人冷たく笑ふ雨が降り　天國
商人も非常時氣分でひとつ負け　好郎
商人に嫁いだ姉が他人めき　山海子
喰ふだけは出來ると商人根性見せ　朱金抄
商人になりきれぬ頭が高いなり　皐山
不景氣へ同商賣の多いこと　青柿
商人の目のつけ所に金があり　柳夢
茶漬食ふ商人明日を考へる　葉光
案の定商人根性の名刺呉れ　久米雄
夕刊へ商人が讀む別なとこ　木履
商人の娘サラリーマンへ嫁し　非常兒
あつさりと負けて元値を疑はれ　白英
商人のたやすく物を引受ける　紫陽
同窓生商人になつた便り來る　來翠
商人といふ正月を派出にする　曉童
洋式に店舗をかへたも息子の世　水客
愛敬のよいを商人賞められる　ライト
鍛入の子の角帶びがよく似合ひ　眞一
小商人働く横へ子を寢かせ　三代吉
商人の帽子の埃りも儲けてゐ　正祐
空模樣今日の資本へ伸びる足　九猿
落日の冬を去り行く小商人　新市街
商人と一と口には三井あり　不二號
商人の懷にする紙幣の束　いわを
商賣に馴れて融通ばかりする　芳泉
商人のつもり前垂強くしめ　琴泉
三十で番頭さんに仕上げられ　春光
商人を希望して居ぬ學士なり　牧人

佳句

算盤へ商人らしい端をつける　紫陽
貸し倒れもう商人が嫌になり　青柿
商人の腰の低さに儲けてゐ　歌都路
ぬかるみへ愚痴が出てくる小商人　宵明
商人の眼が政變へ急ぐなり　青兒
商人は商人らしう座つてゐ　利生
恩給が妻の名でする小商人　文庫
やり繰の金は云はず仕入れて來　久米雄
(軸)侮つて商賣人の利を知らず　新水
裝の麗人(12)昭和二年の春

(414)　川上一劍坊

(1)川上爲男(2)一劍坊(3)大正二年三月一日(4)佐世保市(5)佐世保市今福町一四八(6)會社員(7)これは好きな句の代表にはあらねど餘り多くて指定し難ければ、人ならばとうに取組む仁王門(劍花坊)掌の運命線を走る汗(國夫)(8)未だ自信の句なし　地藏尊にらみ据ゑると石になり(9)川柳一途に候(10)昨年十二月結婚、子供はない有つてはたまらんです(11)菊池寛と小利巧者は虫が好かん、(12)昭和五年一月

(415)　奥田綠水

(1)奥田敬一(2)綠水(3)明治四十年六月十日生(4)兵庫縣尼ケ崎市(5)金澤石坂川岸町五ノ五(6)同(但し無職)(7)故伊藤愚陀氏的のもの。最初印象句は愚陀氏と安川久流美氏のもの、汽車に注意すべし女郎花(久流美)ふりむけば夢多かりし運動場(愚陀)(8)自信の句はまだありません(9)演劇、文學的なもの、映畫(松之助時代よりファン)(10)なし(11)別になし(12)昭和四年の秋頃から

(416)　吉田名川

(1)吉田正松(2)名川(3)明治十三年一月一日(4)鳥取縣西伯郡御來屋町(5)東京市杉並區天沼一ノ二二七(6)日本刀鍛錬會(7)なし(8)なし(9)讀書(10)有、(11)なし(12)三十餘年前なるも「川柳人」に關係したるは昭和四年八月頃

川柳パイロット欄

句の優劣

福田山雨樓

句會の試みとして「相摸吟」といふのをやることがある。二句宛を讀み上げて頂戴の點數の多かつたものを勝とするのである今回の課題「眼」の集句は比較的少なかつたから、一つ相摸吟になぞらへて句の優劣を判じて見やう。尤も次の句は集句甲の白眉として、その中から除外しておく。

○見ひらき瞳にちら〳〵と降る春の雪　佐一郎

この句のよさは盲人を配したことによつて雪の美をよく捕えた點にある　しかもその句想の裏に盲人に對する同情の心が秘められてゐて、讀んでゐるうちに何だか涙ぐましい氣分をおぼえる。又「眼」と云ふ題に對して盲人の眼を取材とするなどは仲々構想がうまい。

(東)兩眼の置き所なく見合　濟み　美津女
(西)くぐかれてショップガールの眼のやり場　不二

この二句にはどちらにも難點があるが、先づ東の方をとる。兩眼の、は兩の眼の、としたい。西の句は上五があまりだしぬけであるし、場所の感じが一向はつきりしない。「萬引を見付けて女事務困り」と云ふ句のやうにその人物と場所、還境とがぴつたりはまつて居ないので、句が動くことにもなるし感じにすきが出來る。句想からすれば西の方にわざがありさうだが、もう一歩といふところだ。

(東)眼頭の露へ親父の愛を知る　清美
(西)眼の凹み病床の母に注意され　希照

父の方をとる。しかし眼頭の露は幼稚を免れない。「眼頭のうるみ」とでもしたらどうか。母の方は上五が解し難い。「寐足らぬ眼」と云ふ風に表はす方がよい。下五も用語が堅く說明に了つてゐる。これは輕く「見逃がさず」としてはどうか。尤もさうすれば母にのにはいらない。

(東)一列の眼の前でテストされ　双亭
(西)二皮眼映畵會社のスターなり　笙人

これは引分けと云ふところ。東の方は只ありの儘を述べたに過ぎない。これは澤山の眼にテストされると云ふところに川柳を感じたのであるから、「一列の十四五の眼でテストされ」としたい。西の句は映畵會社が蛇足である。短かい十七音字の中で一語でも無駄があつては良い句とならないのであるから、充分推敲を怠らぬやうにされたい。尤も句想そのものが餘り單純である。もつと二皮眼を生かさればいけない。

(東)一目の手順違つて眼が出來ず　柳夢
(西)君が代と揚る國旗へ歡喜の眼　凡人

これも引分けである。双方とも十七音字の文章といつた域を出てゐない。東の句は圍碁の眼のことを云つたものであるが、「眼」と云ふ題にはちと控へられたい。そして動

物の眼といふ範圍で詠まれたいと思ふ。西の句は下五が説明になつてゐるから、「涙ぐみ」なんかとすること。しかしそうしたつて、もと〳〵着想がありふれてゐて、誰でもが經驗することであるから、もつと新らしい句材を見出すことに努められたい。

(東)壹り子の眼今度は狐追うて居。　つと夢

(西)失業の眼は靴の先を行く　墨洲

西の勝とする。東の方は「狐」といふ用語が妥當でない。これは多分狐の首卷きをした婦人の意であらうが、餘り省略し過ぎて通じ難い。それから「今度は」は意味のない言葉ではなからうか、作者の一考を望む。西の句は眼を「まなこ」を讀ましめるところに、多少の無理と損がある。普通に「め」と讀ましておいて、足らぬ二音字には有効に盛るべきものを盛ると云つた用意を望みたい。しかし原句でもよくわかり穿つた點を頂く。

(東)寒空へ狂人の眼のうつろさよ　青柿

(西)俺の眼の黑い内はと肩を張り　楚堂

この二句は本集句中での好取組で、仲々雌雄を決し難い。東の句は狂人といふ人物を捉へて、虚無的な主觀を訴へてゐるし、西の句は「眼の黑い内」といふ生々しい言葉で、人間味を表はしてゐる。そこで多少の難點をあげて見ると、狂人の句の下五には甘さとたるみとが感じられるので寧ろ「うつろなる」とした方がよいと思ふ。西の句の下五はも一つぴつたり來ぬところがある。これは「子に嚴し」とか「我を折らず」とかにしてはどうかと思ふ。ところで原句の優劣を比べて見ると、東の句がその觀點の鋭さにおいてより迫るものがあるので、東に軍配をあげる。

○

句の優劣と云ふものは、左樣に簡單に決められるものではないが、課題吟の場合はその題を最もよく生かしたものが、優れた句となるものであつて、題を生かすには類想を避け作者獨自の觀察と素材を捉へ、それが充分に推敲することが一番肝要である類想を脱するのには、多讀多作より外に道はない。句に對する見識が狹いと、折角優れた着想を得ても、それは既に古句なり現代句なりに出てゐるとすれば、新らしく發表する價値がないことになるから、出るだけ多くの名句、佳吟を知つておくやうに心掛けなくてはならぬ

尤も數多い句のことであるから、記憶し切れぬものではないが、一句でも名句を覺えておけばそれだけ作句の參考になるし、類想を避けることにもなるわけである。

作者獨自の觀察と云ふものは、作句に精進すればするに從つて、その觀察眼なり感受性が肥えてくるから、不思議なほど次から次へ句が生れてくるものである。その樂しみを樂しみとして、創作意力を盛んにせられんことを望みたい。

次の課題

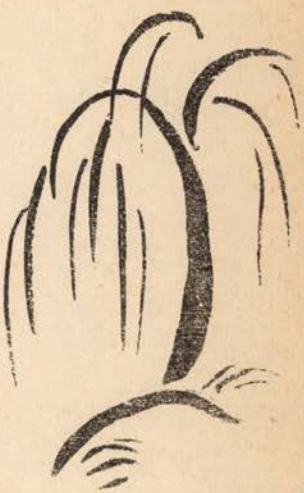
「卒業」十句以内　〆切三月十日

宛先　本社事務所

用紙　ハガキ

各地柳壇

いのちあるかぎり創作を句れ



路郎・汀柳・艸樂・整理

投稿清規

一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
二、文字正確明瞭に記載すること
三、開催月日及場所記入のこと
四、締切は毎月末日とす
五、投稿先は本社事務所

川柳雑誌社
御旅吟社

新年句會

一月十日　於石堂

席題　膳

多郎選

卒業へ下宿の膳とも別れて來　清美
据膳へ叔父の權利を主張する　新水
お膳へはキッチリ座る兒のシッケ　みつる
(佳)樂しさは朝の膳に陽のあたり　翠夢
(同)薩膳にすつかり酔をさますな　同
(同)さしむかひお膳が邪魔になつてゐる　汀柳
(軸)獨酌の膳はいびつに動くなり　翠

席題　陰口

選

陰口がどうであろうと金をため　勇
陰口は地下鐵でいふ事にする　春水
嬉しさは陰口の咳通り過ぎ　多郎
陰口が今頃わかる社長なり　清美
陰口も云はれる人になり給へ　同
(佳)陰口の多い妓を呼びにやり　多郎
(同)陰口をはつきり敷居越に聞き　新水
(人)表情の皆んな俺への噂なり　清美
(地)陰口を伏見勝なる妓に泣かれ　新水
(天)陰口を聞える樣に聞かされて　汀柳

席題　符　牒　新水選

親讓りの品は符牒で値が書かれ　汀柳
忙しい丁稚　符牒覚えてゐる　春水
若且那符牒のことなぞ忘れてゐ　みつる
符牒など云つてお客に笑はれる　同

席題　賽　路郎選

職の無いことに賽ころはなされず　新水
剩錢を出す巾着に賽も出る　同
インチキな賽とも知らぬ冬の風　同
〳〵ころは茶碗の中で生きて居り　汀柳
(人)心なき賽を投げつけ・人居る　多郎
(地)賽の目の一をいつて振つて見る　新水
(天)ダイノ〻女は意地となにけり　翠夢

席題　おちよやん　汀柳選

(小婢　おちよぼ)

おちよぼまだ短い着物で走つてる　勇
姐さんの鏈曳おちよぼ見て歸り　みつる
おちよやんの笑顔何んぢ言わず出る　多郎
おちよやんとダンスみやるなり　翠夢
おちよやんはその正直が笑はれる　路郎
仰山に逃げておちよやん叱られる　同
おちよやんはついでに寫眞うつる　同
おちよやんの顔が覺え羅字仕替　新水
おちよやんの　が問はれてなつむし　同
(佳)蓮狀へおちよぼはぶた口をきゝ　翠夢
(同)蝙蝠のやうにおちよや身を逃し　路郎
(同)おちよやんにかかはがら祝儀やり　みつる
(人)おちよやんの目に金持の人は　同
(　)おちよやんの駄賃兩方から貰ひ　清美
(天)自動車でおちよやんひと戻つて來　路郎
(軸)おちよやんの夢に舞妓の鈴が鳴り　汀柳

兼題　チョコレート　路郎選

戀人は未だ板チョコが好きでゐる　清美
チョコレート苦勞を知らぬ子で育ち　春水
チョコレートぐるぬ子供の持ち重り　新水
(人)淋しさに銀紙捨てチョコレート　同
(地)板チョコへ舞妓の頭は細かりき　翠夢
(天)チョコレート匂ひ妻の夢多し　同
(軸)チョコレート春の日永を思はる　路郎

兼題　溫泉　路郎選

溫泉へ來たが女ぼ恐くなり　清美
せめてもの溫泉だけの若旦那　勇
溫泉であはれあの娘は處女でなし　みつる
燒印の下駄城の崎で降りこまれ　新水
(人)溫泉へ來て相場が氣にかゝる　春水
(地)溫泉の浴衣だけでも苦を忘れ　同
(天)溫泉の匂ひをのせた川のいろ　汀柳
(軸)溫泉の浴衣こよひ限りの山を見る　路郎

御池橋支部正月句會

兼題　アパート　いわを選

アパートの好み女の儘となり　夢裡
アパートもおしめを干した高架線　青兒
(軸)父死んだ事アパートへ報せ來る　夢裡

兼題　設計　夢裡選

設計室神經質のつゞひなり　晴栽
設計圖資本家らしい窓の數　青兒
最う一度見直して寢る設計圖　いわを
(軸)アット云わせた設計自信もつ居る　兒選

席題　流行歌　青兒選

流行歌知つてゝ女給によくもてる　晴栽
ステップへラヂオが送る流行歌　夢裡
口びるが先に覺える流行歌　いわを
(軸)流行歌風呂の中から自惚れる　互選

席題　債鬼　互選

非常時を使つて債鬼取りにくる　晴栽
貪慾を樂しむやうな債鬼の眼　夢裡
債鬼から逃れ遊覽船に乘り　いわを

席題　宴會　互選

宴會で安月給がよく飲める　晴栽
小間通り拔け〳〵宴會場　いわを
宴會へ立身せぬのよく踊り　青兒

川柳雜誌社
大鐵局支部

畔柳社例會

一月十日　於大鐵局倶樂部

兼題　平和　山雨樓選

廢線の廣さを鶴の親子連れ　某人
(人)家内中目の出を拜むことになる　九天
(地)鶴が來る村豐作の霜となり　久米雄
(天)賴りない里にされて平和なり　喜山
(軸)お神輿が少しは荒れた平和村　山雨樓

兼題　注連　山雨樓選

銀狐大社の注連へつまらなく　木履
注連賣りの足へ紙屑吹き溜り　某人
紺の香の法被職場の注連かざり　九天
注連を賣る女の聲も暮のもの　久米雄
注連つけてタクシー紋日の風を切り　笙人
(人)ちさい注連はゞ土藏に陽がぬく　水客
(地)注連繩の太さあるじは赫ら顏　某人
(天)散髮の頭お注連を分けて出る　喜山
(軸)注連張つた九尺二間に煙が出る　山雨樓

兼題　蜜柑　山雨樓選

宿醉にみかん半分せびられる　笙人
和氣靄々と蜜柑減りゆく　某人
枕元みかんの皮も獨り身の　九天
元日の蜜柑口紅忘れた娘　木履
(人)双六へ蜜柑箱から出してやり　喜山
(地)二階借蜜柑の皮を投げかへし　一蜂
(天)夜が更けたらしい蜜柑の爪たし　某人
(軸)極道の蜜柑むく手のきやしやな　山雨樓

兼題　鰯　披講　互選

下宿屋の鰯へ箸の手が重し　山雨樓
ロケーション鰯の村の日に燒けて　某人
結局は鰯大盛買される　久米雄
鰯買ふ女の足袋をみてゐたり　水客
親一人子一人鰯燒くにほひ　山雨樓
鰯賣り馴染の多い長屋街　一蜂
お祭の鰯のすしへ子等歸り　同
鰯屋の賣れたら汗の拭き所　某人
大聲で來る鰯屋の十八九　秀太
空晴れた聲で曲つた鰯賣り　久米雄

席題　差支へ　九天選

義理がいた人と歌舞伎パタリ遇ひ　一蜂
差支へ無しに人間らしい息　一光
差支へ出來て招待券をやり　笙人
(佳)養子の身差支へない字を選び　某人
(同)出勤へ井戸のポンプがみな氷り　山雨樓
(軸)餅燒きのあみがわりぬ妻の留守　九天

席題　郵便　喜山選

郵便屋もうこれですむ峠越え　一蜂
郵便を驛長さんに頂むなり　笙人
父親に出す郵便の二三行　秀太
嘘ついて郵便ポストに振り返り　久米雄
婚禮の荷を横切つた郵便屋　山雨樓

(住)郵便夫舊家に啞の子ありを知り　九天
(同)年賀狀父は池邊の鶴詠み　同
(住)郵便屋突ひを知らぬ顏で來る　山雨樓
(軸)待つてゐる書留が來ぬ日曜日　喜山

川柳雜誌社
螢ヶ池支部

句會（螢ヶ池）

一月十三日　緩紅報

兼題　母　汀柳選

母のない子にチラ〳〵とふる雪よ　淺道
何にかしら母になつてるひな祭り　錦雀
ふるさとの蛙の夜を母とゐる　公平
スラム街母は子に手をとられてる　暖枝
目の惡　母の內職はかどらず　豆樂
八人へまだ〳〵あるよ母の愛　蔦女
雷が恐くてならぬ母でした　松雨
追憶の母しら〳〵と雪の夜　同
編棒に冬の陽がある母憶ふ　史呂
おめでたうも云はずに母の看護する　同
はゝひとり子ひとり雪がつもるなり　史呂
母居ます御空にゆきたき日もあり　優勝
記憶とは僕をのこして嫁した母　美智子
母逝きて針のさびてる家となり　六朗
(住)熱の手は小さく母ににぎられる　同
(同)母の手のひび我手の美しさ　淺道
(同)家出した子の名をよんで逝つた母　豆樂
(同)鹽煎餅母は侘しい音をたて　公平
(同)母一人子一人鍵は別に持ち　浮鬼
(人)興奮へ母の姿をよびおこし　史呂
(地)母の掌に貧しい母の錢が鳴る　豆秋
(天)母のない子の綻びへ黃昏れる　のぼる
(軸)亡き母の部屋に座りて憶ふこと　公平

兼題　天井　浮鬼選

泣いた目に天井の戒突つてる　暖枝
血を喀く友のあり天井ゝみつめたり　一更
天井をみてゐる內に蝕齒を拔かれ　史呂
このうれしさを平つたい天井よ　緩紅
寢下足な朝だ天井板ひくし　六朗
靜けさへ天井ものを想はせる　豆樂
かち合つた瞳を天井へもつてゆき　公平
まだ生に執着あつて見てゐる天井　同
(住)天井が私の寢顏見てました　蓉子
(人)守り札天井とゝもに煤けてゐ　史呂
まさる
(地)豫後問へば醫者天井へ瞳をしぼる　のぼる
(天)みな愉しそうに天井低い家　緩紅
(軸)天井も窓も敵の應接間

席題　日記　史呂選

感激に頁のたらぬ日記帳　葉津子
元日は昨年と同じことを書く　六朗
日記にも泣いた涙のにじんでゐ　豆樂
(人)欄外へまで書く日記うれしい日　緩紅
(地)僞りを日記する日のつゞきなり　汀柳
(天)闘病の記錄となつた日記帳　浮鬼

席題　スケート　流之介選

急カーブしてスケートに山は晴れ　緩紅
スケートの吹雪にともしびまたたく　六朗
(人)スケート〈雪がチラホラ黃昏れ　浮鬼
(地)子が逝でスケートさびた冬となる　六朗

(亡き弟)

(天)スケートを見れば弟可愛そう　暖枝

席題　氷柱　互選

つらゝきら〳〵冷水摩擦の息白し　今川
井戸端の氷柱小犬が走る朝　豆樂
ピツケルに氷柱まぶしく碎けたり　青鬼
獨りゐて氷柱の融ける音の晝　緩紅
母の手が荒れる氷柱ゝみてゐたり　史呂

席題　雪　鮎美選

ひとりゆく雪解の徑が夕燒けぬ　のぼる
散る雪におごる男となりませう　木の葉
老母の熱さがつた朝の雪うつくしい　六朗
降る雪が私を淋しくさせました　葉津子
雪の朝雀の親子降りてくる　流之介
(人)戀のないたばこに雪がかゝる　同
(地)雪光るわが戀たちし日のながれ　同
(天)貰はれてゆく弟に吹雪する　六朗
(軸)にんげんの眼にみる雪は泥まみれ

(軸)ひとり旅雪がとけたる鼻のさき

席題　笛　鮎美選

無明の闇に笛は冴へたり　公平
(秀)ならぬ笛がおもちゃ箱にある　鮎美
(秀)にんげんの笛の手垢にすべる

阪大川柳會例會

兼國根山彥氏洋行送別句會

一月二十五日　大阪　丸島利生報

兼題　溫泉　路郎選

溫泉の子供大臣に驚かず　千秋
湯の宿の廊下冷たく歩かされ　同
妻君の湯治の留守の出來事さ　同
湯の宿の女中に圖星さゝれたり　利生
儲かつた足溫泉へ伸ばしに來　芳一
溫泉の褞袍へ追手やつて來る　同
溫泉の土產を買へぬ二人居る　一杯
呼んだ湯女朝の別れを知つてゐる　同
併達卷の妻も又よし併豆の宿　青一路

山の湯で大阪辯をなつかしみ　同
湯の窓は新婚と見た間を選み　柳秀
溫泉の夢はかなくも解消へ　筑川
(人)溫泉の効能奚ひ〳〵聞き　たけを
(地)のうの〻山の湯槽で雪が聞く　山彦
(天)溫泉や座り羅漢に寢る羅漢　栗
兼題　松過ぎ　路
懷手松がとれよがとれまいが　耶選
松過ぎて街は淋しい元の色　柳秀
ポーナスが消へてしもふて松が　同
松過ぎの風は小腰をかゞませる　利生
松過ぎに溫布のとれた兒を連れて　芳一
松過ぎになつても父は歸り來ず　たけを
松過ぎになつても遊ぶ子を案じ　方正
松過ぎに素人賭博まづあがり　同
松の内旅行中でも事はすみ　筑川
(人)松過ぎて妻ベッチンの足袋を　同
(地)松過ぎてしまつたしたい炭を　柳秀
(天)松過ぎもへちまわるか野良寒し　同
兼題　洋　行　路
洋行のこつを恩師に聞かされる　方正
洋行費だしても見たい人である　耶選
洋行はエヽ事してくる樣云はれ　たけを
里の母外遊の留守案じに來　芳一
留學へ飛ぶ雲もなき船路なり　氷炭
(人)足音は高く日本の音で行け　芳一
(地)洋行の土産はメイド・ジャパン　方正
(天)伯林の夜が君默々と歩く氣が　湧三
送(柳根博士)
雜　吟　路
父が來る便り洋書を借り集め　耶選
倖せな壽命花輪でかざられる　柳秀
末ッ子にゝりこめられて良い機嫌　筑川
(秀)死は寂しいとてお禮を云つてから　たけを
席題　歐　洲　路
知らぬものゝ中で歐洲よく光り　栗
列强がクラムを組むヨーロッパ　方正
ヨーロッパ渡り歩いたやうに云ひ　耶選
ヨーロッパ愛にかはりはないと云ひ　芳一
長々しう歐洲みやげ聞かされる　千仞
童貞の行く歐洲は危ぶまれ　湧三
西(西)着いたがホームシックなり　柳秀
(人)ピッシバリエンと書く故國の友に寄し　同
(地)イギリスで獨語も一寸混ぜるなり　利生
(天)伯林へ子供の書く字がとゞき　たけを
(軸)兩替の苦勞もあつて巴里に來　筑川
(同)伯林で女房にすまぬ日を送り　路郎
(同)西部戰線わが童貞異狀なし　同
川柳雜社
神戸支部　**句會**(神戸)
一月二十七日　於華水居　竹楓報
今年度最初の集ひ、故日野友竹翁の追悼を兼ねて華水居にて句筵を開く
追憶　華　水選
追憶へおんなじとこが見つめられ　幸捐
追憶に舊師の頰が落ちて居る　古左右
追憶の二人へ火鉢白い灰　春秋
追憶に耽ける瞳に流れ雲　竹楓
アルバムにある追憶へ指を折り　刀郎
(軸)追憶談同じ意見になつてゐる　華水
赤面　竹楓選
いやどうもいやはやどうも酒の恥　春秋
赤面へたゞ反感があるばかり　刀郎
魅力　幸捐選
れえいゝじやないのと魅力後へ來　春秋
照明の通り魅力が動くなり　刀郎
意識して毛皮のマダム目をつむり　竹楓
値切る　吉左右選
としよりに値切られてゐまらず屋　春秋
値切るだけ値切り蟇口あけてゐる　幸捐
肩越しに値切つた剩錢を貰ふなり　刀郎
値切る氣へ休業札がかけてあり　竹楓
値切るのが出來て夜店へ人がより　華水
(軸)値切つてる客のみなりはみすぼ　吉左右
腕白　春秋選
腕白時代故郷の友も知り　同
腕白の手が屆くとこにベルがあり　華水
母の目にすてゝは置けぬ智慧を出し　刀郎
そこらには居ない子供へめしが出來　竹楓
今泣いた子供もすべるすべり臺　同
(秀)腕白の頭大きな手でつかみ　吉左右
(軸)母親へ喧嘩の傷をかくしてゐ　春秋
肉　刀郎選
錢湯のハカリ自信のある體　華水
肉鍋へどつちも仇名覺えてゐ　竹楓
アセチリン瓦斯が明るい肉襦袢　春秋
(軸)肉親の不平朝寢の顏で云ひ　刀郎
聯想戯作
1うなづいてくれるうれしいのごぼう　春秋
2うなづけば禿が見えます支配人　華水
3支配人振りむくとこで振りかへ　竹楓
4ふり返る女形へ變態性がある　幸捐
5雪之丞うつかり戀の瞳を感じ　刀郎

6戀の唄タツプダンスの音で來る　吉左右
7惚れてゐてカクテルグラス唄はず　春秋

以上

川柳雑誌社 **光笑會・行人會新春句會**

一月二十三日　於　ナメ喫茶店

今回本社より支部選者として推薦された秃山、與三郎兩君を迎へて茲に輝かしい新春句會を開く、當夜は更に川柳福引を出席者に呈上、九時すぎ散會した、特に遠く出席下さつた、亂耽、正光兩氏へ厚く御禮申上ます

史・呂報

席題　寺　　艸樂選

蒐印帳持つてせわしく寺へ寄り　青鬼
モ！ニンゲンずらりと寺に鯨幕　秃山
繪のやうに女出てくる雨の寺　節子
舊惡に疼く傷ある寺男　正光
山寺へ冬が集めて煙が立ち　夕鐘
寺の軒借るお芋屋も壇家なり　春光
尼寺に算盤が要る夜更けなり　鮎美
寺さむ〳〵と肉親にわかれる日　同
寺詣りする母親へ小錢出す　六朗
(佳)年寄にすつかり委す寺の事　正光
(同)法善寺ちよつぽ拜んでおちよぼくれ　與三郎
(同)雀來てお寺の瓦が白いなり　鮎美
(軸)緣日をぶつ〳〵云ふてる寺男　艸樂

席題　火　事　　正光選

二階から火事がきれいな川の巾　鮎美
近火とも知らず愛の巢出たつきり　夕鐘
火事見舞青年團に支えられ　秃山
純喫茶火事の方角だけは聞き　亂耽
團服が着たい火事場の非常線　與三郎
燒跡にしては金庫のきれいすぎ　里十九
もう消えたそうだと幹事落付かせ　艸樂

席題　辨　當　　亂耽選

童心にかへり辨當ひらくなり　鮎美
受付で寒い辨當渡される　豆秋
梯子酒辨當箱をちやんと持ち　正光
辨當へ恥かしい程儲けて來　夕鐘

兼題　手　拭　　與三郎選

赤手拭へら〳〵踊想わせる　彩泡
鼻先のほうかんむりで請りに來　夕鐘
手拭で嗤呵は鼻をこすり上げ　艸樂
手拭で馬鹿な旦那の目を隠し　春光
戀の虜となつたタオルのすきとほり　亂耽
(佳)一人娘の手拭配る舞ざらへ　鮎美
(同)手拭を渡す女の艶に見え　節子
(人)手拭と立つて親方まだ無言　亂耽
(地)辛抱の手拭かりき晝の月　鮎美
(天)かつぽれ〳〵さらの手拭絞られ　春光
(軸)手かやれば腰に手拭ある生活　與三郎

兼題　寄　席　　秃山選

寄席を出て酒のにほひと突きあたり　縱紅
飛込んだ寄席でマントの雪が解け　豆秋
高座からもおもろい顔ばかりなり　夕鐘
寄席やけに太鼓を叩く宵の口　艸樂
仲よしの話とぎれた寄席の前　浮鬼
(佳)歸りには少し飲む氣の寄席なる　與三郎
(同)寄席を出て寒行の列割つて拔け　史呂
(同)寄席氣分女正體なく笑ひ　亂耽
(同)高座から吐く毒舌へ妓がまも　鮎美
(人)臨月を寄席で笑ふてよい夫婦　豆樂
(地)何でもない事が笑へる寄席の粹　亂耽
(天)樂々でも寄席へ出るマントを着　秃山
(軸)は智惠を出すぶら〳〵寄席に入る

川柳雑誌社竹原支部 **千引吟社例會** 町田承春報

十二月十二日　於藤原水仙居

兼題　手　　芳泉選

土くれをいぢつて暮す手に生れ　春帆
ヒビの手を主人まだ〳〵不足なり　碧園
手のひらに苦難時代をしのばせる　承春
歐留多會握つた手が笑つて居　廣志
情熱をこめて握れば冷い手　春帆
掌のはらで火殼器用に裏返り　呂烈
手をもんで詫る粗忽へ目が細り　彌生
(人)ヘンゲコに俺の職業見破られ　春帆
(地)我が影の障子に寫る手内職　廣志
(天)表彰へふしくれだつた手が目立ち　承春
(軸)金持ちの手相で明日へ苦勞する　芳泉

兼題　耽　溺　　春帆選

耽溺の悔てかへらぬ夢を追ひ　碧園
耽溺へ臍首の噂あわてさせ　芳泉
落ちた涙が耽溺のあと冷たく光る　呂烈
(佳)耽溺のフット世間を狹く見る　承春
(軸)耽溺へフット淋しい酒の味　春帆

兼題　卷　紙　　承春選

卷紙の文字美しく無心狀　芳泉
(佳)卷紙にして文案の短か過ぎ　呂烈
(同)卷紙の封筒ポスト重く受け　芳泉
(同)卷紙の眞情假名も交るなり　呂烈
(人)卷手紙涙のあとがおちゝ居た　春帆
(地)卷紙へ母がくるんだ五圓札　蛙庵

（天）末筆以下讀まずに卷で事が濟ん　呂烈
（軸）一卓をさゝげて書いた卷手紙　承春
席題　石　鹼　東　陽　選
義捐金などと石鹼買わされる　承春
シャボン玉夢をえがくに似てかなし　呂烈
（佳）秋の日へ石鹼玉が消へて行き　春帆
（同）石鹼にまみれて又音ちかゝり　呂烈
（人）石鹼が俺の個性にちびて來る　春帆
（地）滑らかな肌だと思ふ泡のなか　呂烈
（天）たまさか使へば垢が黑ふ浮き　彌生
（軸）かけもちで石鹼減らす年の暮　呂烈
席題　靴　東　陽　選
昇給にたのしい靴のヒモ結ぶ　彌生
片ちびの靴と外交員の口　芳泉
靴鳴もいと朗らかに朝を出る　承春
靴音は俺の氣慨に似て荒し　東陽
（軸）空腹の腸に沁みこむ靴の音　呂烈
席題　説　教　彌　生　選
聞騙れた辻説教を通りぬけ　承春
信心と別に説教聞いてゐる　承春
説教僧眠りを覺す事も云い　春帆
（佳）沁みゝと罪悔ゆる説教所　東陽
（同）説教に心うたれる過去を持ち　芳泉
（軸）説教を聞く邪念のまだ去らず　彌生

第五回尼崎句會（兵庫）

十二月十五日　吉　朗　報

席題　洋　服　互　選
洋服のかくし女房がしらべてゐ　至郎
買い安い月賦の洋服高くなり　馬角
身に合ぬ洋服を着てすましてる　路風
座りにくく相に洋服長まり　幸多樓
洋服を着て踊つてる安來節　同
席題　る止ノ句　路　郎　選
故郷より父が來なけりや母が來る　北月
朝毎に蜜柑の船が着いてゐる　川舟
心中の相手淋しく生きてゐる　幸多樓
兼題　女　湯　路　郎　選
女湯をそつとのぞいてまだかいな　北月
女湯も番台だけは平氣で見　榮山
せり市の聲かと思ふ女風呂　岩井
長男の女湯きらふ年となり　南越
特種の女風呂から拾ひ出し　巨作
新嫁の乳房がどうのと女風呂　串二
女湯へ一家總出でやつてくる　欽央
風呂屋でも姦しいのはあの女　路風
新婚の女は風呂でてれてゐる　同
（人）こはかつた話眞晝の女風呂　巨作
（地）女湯に使の男背を向け　杜郷
（天）歐磨の好きなポーズで流してる　幸多樓
（軸）子澤山女湯へ又忘れもの　路郎
兼題　松の内　路　郎　選
松の内早や串柿は拔けている　串二
新夫婦酒なめて見る松の内　欽央
松の内藝者の足は急いでる　路風
カレンダー明日の初出へ破られる　巨作
松の内樂しみたらぬ内に暮れ　同
（人）松の内芝居が三日續いてる　路風
（地）飲み過ぎの辯解が立つ松の内　幸多樓
（天）兄弟も名刺で上る松の内　串二
（軸）そろ〳〵とすき燒になる松の内　路郎

第六回尼崎句會（兵庫）

一月十二日　吉　朗　報

席題　損　互　選
缺損と別に大きい廣告燈　巨作
損になる算盤も一度はじき代へ　同
損害の訴証大きく書いて置き　杜郷
損してもお得意ですともうけて居　牛少
自分ひゞ損をしてゐるやうに見せ　路郎
一厘の損を算盤つきつける　同
内にゐたら損がいくよに出てしまい　同
席題　夜　互　選
夜は更けて碁會の後は寢つかれず　熱田
氣がついた樣に夜警は石を打ち　幸多樓
寒行の更けて聲だけ高うなり　牛少
勘定日四時歸りでも夜が更ける　喜緣
あてのない夜を待ちつゝ居候　同
夜逃した昔も書かず立志傳　巨作
新婚の夜は云ひ知れぬ内に明け　同
兼題　隣　路　郎　選
お隣の後家へ變つた顏が見え　路風
隣までそつと來て見る生の親　至郎
（人）食客を又隣りのがこぼしに來　同
（地）引越と當座隣りのかごも掃き　幸多樓
（天）隣まで聞へる聲に女房負け　至郎
兼題　目　路　郎　選
神の目で見ればさぞかしみにくかろ　北月
目が高いとほめて道具屋買せる氣　幸多樓
目にあまる樣に一人子育てられ　馬角
（人）妻の目に隣の主人よく動き　至郎
（地）おつきあい目にハンカチあてゝ居　路風
（天）放送が送ると隣り靜かなり　榮山

義士句會（島根）

十二月十四日　夜於事務所　祥月報

席題　千鳥足　春

（佳）千鳥足馴染の所がもう一つ　都之介
（同）遊廓の灯が吸ひ込んだ千鳥足　柳人
（同）電柱がこゝにもあつた千鳥足　天痴人
（同）千鳥足灯が一ぱいに迫るなり　都之介

席題　波止場　祥月選

情熱を掃ふ波止場の朝となり　春朗
生活の波止場に妻が今日も待つ　天痴人
默心をそゝる波止場の唇よ　冷兒
（佳）波止場から波止場マドロス戀する　卷二
（同）落ちぶれては波止場の月と寢る　柳人
（同）波止場の風景のスカン卷きし女　都之介

席題　花道　都之介選

花道へ出て來た役者へ寫眞班　山川兒
花道で大高源吾笹を賣り　祥月
花道へ二階からみかんの皮が落ち　山川兒
花道はかける役目の追手なり　柳人
花道で見る白粉の濃ひ事　卷二
花道の巾に光つて定九郎　柳人
（佳）花道の側はおやまの素足を見　春朗
（同）花道へそろりと走る高田馬場　莞路
（同）花道であと振りかへる別れなり　卷二

席題　城　柳人選

低空飛行天守の上で機首をまげ　卷二
松籟や城は無念の姿なり　都之介
水攻めの城に烏か飛んでゐる　春朗
冬の月城默々と寒いなり　天痴人
嗣え切れぬ姿で城は風を受け　山川兒
武士が出そうに城の晝靜か　卷二

席題　燒酎　天痴人選

燒酎をのみぬ呆けぬ寢てしまひぬ　都之介
燒酎も呑めず娘を賣る話　卷二
燒酎屋前に荷馬車が一つ待つ　山川兒

席題　卓球　冷兒選

ピンポンを闘む若さであつてよし　柳人
ピンポンも家庭教師は上手なり　卷三
脂肪過多症の社長とピンポンの相手　春朗
ピンポンに人妻の裾亂れ過ぎ　都之介

席題　不良少女　山川兒選

除夜の鐘不良少女の涙する　柳人
ほのめかす不良少女へ目で應へ　都之介
捨てられてからが不良の女なり　卷二
慈善家でバツトガールの父でゐる　春朗

席題　吉良上野　卷二選

炭小屋へ溫み取られて吉良は果て　柳人
上野がちと若すぎる村芝居　莞路
上野の顏が扇れたみつぎもの　都之介
上野が出ると見物飯を喰ひ　冷兒
上野も蒲團の溫みあとできゝ　春朗

川柳雜誌社
今治支部

新年句會（愛媛）

一月十一日　於川柳庵　曉童報

兼題　悪人　曾我部宵明選

悪人の後姿へ月が落ち　心府
悪人になれず金とは縁遠し　一風
悪人の何を輕むか神詣り　文庫
悪人の肩に淋しい陽が殘り　一風
悪人は六法全書中にして　都留逸
悪人と善人晝の溫泉にひたり　芳岸
（佳）電燈がついて悪人起きてくる　心府
（同）悪人になり得ぬ節くれ立つた指　文庫
（同）悪人のその標札の太いなり　芳岸
（同）悪人になろうと盃グツと干し　曉童
（同）悪人の夢にも似たり曼珠沙華　心府
（人）捕つたとこで悪人目をさまし　同
（地）悪人の橋善人の橋すべる　百世
（天）悪人へ滿員電車行きすぎる　同
（軸）悪人にして美しき聲をもち　宵明

兼題　前掛　渡邊曉童選

前掛へ男の無理がまともなり　宵明
前掛が以合ふ女で苦勞する　心府
（人）前かけで小走りにゆく十二月　文庫
（地）エプロンへ一枝殘す池の坊　宵明
（天）前かけへ子は本當に泣きにくる　一風
（軸）前掛を自動車で仲居はずす　曉童

兼題　風呂敷　小松選

風呂敷の玉子まつすぐ歩るくなり　曉童
風呂敷のまゝ故郷へ戻される　尼花
風呂敷で三年先を期して出る　宵明
（佳）風呂敷を何云はずかり　心府
（人）風呂敷を小脇に汽車の隅にゐる　文庫
（地）實屋出た風呂敷は米を買ひ　一風
（天）風呂敷は男がさげた雛になり　芳岸

兼題　昇給　心府選

昇給の金で足りない程飲まれ　一風
お隣も昇給をした臺所　宵明
昇給と云ふ嬉しさを歩いてゐ　小松
昇給の給仕甘栗買つてくる　宵明
昇給へ社長の訓辭ちと長し　曉童
（佳）昇給へ生れた子の名はでにる　同

(同)昇給は話だけなり春となる　芳岸
(軸)昇給へ社長はうまい事を云ひ　心府

席題　末　席　一　風選

末席は末席同志酌み交し　心府
末席の年増が一ッ酌いでくれ　宵明
末席の座布團柄が違ふなり　曉童
(軸)末席を汚しまするが藝達者　一風

席題　代　書　互　選

紙切がいくつも附いて代書出來　心府
堪忍の末が代書の戸をくゞり　宵明
うなづいて代書眼鏡をッとかけ　小松
代書の暇へ碁盤もち出す　心府
しまいまで聞かずに死亡屆かく　曉童
破産申請代書あつさり書いてのけ　一風
口に墨附けて代書ほ飯にする　心府

川柳雜誌社
松江支部　**新年句會**(松江)

一月拾日夜　於ミドリ喫茶園　祥月報

兼題　財　布　祥　月　選　砂詩朗

儲けない同志財布の柄を撰り　柳人
縞財布母の祈願も念が入り　夢迷
どうする氣拾つた財布どうする氣　都之介
晝の妓へ財布大きくあけて見せる　卷二
ゆるしてる女小さな財布見せ　柳人
會計の持つはがつちりした財布　都之介
暮口を上眼使ひにあけるなる　錦葉
二次會は財布の中が調べられ　氷月
金貸の財布の前にけつまづき　夢迷
(同)返盃に空德利はちとあわて　同
たばこ買ふ錢だけ財布飲んでゐる　氷月
(同)返盃を待せて謠一つ出し　柳人
(佳)雜踏やわが暮口は臍の上　都之介
(同)空財布日本晴がうらめしい　氷月

兼題　氣　質　卷　二　選

浮氣ぽい氣質は知つてほれてゐる　京葉
爪に垢ためて女に甘いなり　莞路
マドロスの氣質にほれる酒をのみ　氷月
人格を甘く見られた氣質なり　同
無心狀友の氣質を知つてゐる　京葉
厚齒からんころんと僕の氣質なる　都之介
柔順な氣質であつてほれられる　氷月
ほめられる氣質財布をまかせられ　砂詩朗
(佳)盃をふせて氣質をうたがわれ　莞路
(同)竹割つた氣質で金がありません　同
(同)父さんの氣質そのまゝ二男なり　砂詩朗

席題　猪　柳　人　選

猪のやうな男で損ばかり　卷二
横道が有ると猪知らぬなり　錦葉
猪は後見るのを知らぬなり　砂詩朗
(佳)出世して歸れば猪は出ない村　莞路
(佳)インフレの猪ぶたに似てしまひ

席題　返　盃　都之介　選

惚れて居るその返盃はきつくつぎ　卷二
返盃をもう一盃といゝ藝者　錦葉
あでやかに藝者返盃するのなり　冷兒
返盃を忘れた頃は瞳がすわり　莞路
返盃へ都々逸一寸切れたまゝ　京葉
返盃をほせばすつかり醉ひつぶれ　祥月
(秀)撥の手を止めて返盃とりつがれ　天痴人
(同)返盃へ女の香ブンと來る　氷月
(同)返盃に空德利はちとあわて　同
(同)返盃を待せて謠一つ出し　柳人
(同)返盃の催足をする伯父の艷　砂詩朗

席題　戀　仲　京　葉　選

戀仲と知らずうつかり言ひ過し　砂詩朗
戀仲に火鉢すげなふあつかわれ　都之介
戀仲へ感傷的な月が出た　天痴人

(萬　歲　師)

戀仲の二人舞臺に叩き合ひ　柳人
戀仲は趣味も合つてる事にする　卷二
時に拗れ時に戀仲まろい月　夢迷
桑畑の闇で戀仲蚊が喰つた　天痴人
戀仲を分けてセパード飛んで行き　柳人

席題　思　ふ　壺　砂詩朗　選

しなだれて來るへ女は思ふ壺　京葉
かけられたわなでなんにもかに云ひ　夢迷
誘惑の手段と知らず來てしまひ　莞路
十錢に物を云はせた思ふつぼ　氷月
思ふ壺なんなしたゝかよひつぶれ　柳人
(軸吟)三振をさせバンドを締め直し　砂詩朗

席題　年　配　天痴人　選

年配の消極主義に飽き足らず　柳人
相當な年配になり養子口　冷兒
年配の男露骨な話する　卷二
(佳)年配の威嚴に髭の先の塵　夢迷
(同)髭はと床屋に云はれぬ　都之介

川柳雜誌社
籔川支部　**大地吟社例會**(出雲)

二月一日夜　於緣之助居

兼題　米　緣之助選

尊さは貧苦に堪えた米の味　虹二
米一升かゝへて妻はかへり來る　雨舟
寺男馴れた手つきで米を研ぐ　大朗
米の値も知らずぶら〳〵髮の艷　華村

救護班米の白さにつかれきり　植夫
(人)一握の米生存を尙强ふる　同
(地)米の飯先づ理實に感謝する　雨舟
(天)米の一升買ひに青春を忘れました　朴泉
同　休　華　村選

籐椅子へ公休日といふ長煙管　章泉
失戀に欠勤がちな日の多く　琴月改　凡愚
ペンを休めてふと街道へ動く青春　靜男
公休日昨夕の唄がふと揃ひ　緣之助
休みなき人生の姿じつと見る　雨舟
お休みなき眞白い敷布です　大朗
(人)一息を休み青空に胸を張る　同
(地)風は和やか春を歌つて公休日　好郎
(天)疲れし心休める十燭光の下　松濤
席　すゝり泣き

すゝり泣き母の手になる文を見て　紫光
すゝり泣く女の肩に動く月　植夫
すゝり泣く女へ冷へたを呑み　靖男
すゝり泣く襖へしばし立つてゐる　雨舟
默つたかと思へばかすかに泣くてゐる　緣之助
(人)すゝり泣く中に魔の手は伸びてゐる　松濤
(地)曾天が月に泳ぐ女房のすゝり泣き　緣之助
(天)灯の果に女うづくまるすゝり泣き　華村
同　O　K　植夫選

OK引き受けてからの衾が重く　紫光
春は春はOK街路樹の若芽　好郎
OKとあつさりけりがついた酒　松濤
OKドアーを强く開けて出る　靖男
OKと受けて盃洗斜なり　大朗
くちびるくらい　もちろんオーケーよ　緣之助
(佳)OKと答へ彼女はにげました　凡愚
(佳)OKあゝたいそれた事なのに　紫光
同　白　光選

此の世へ白ばくれてゐる生涯　松濤
白き夜の砂に描いた戀でした　植夫
眞白なショールに春の香して　朴泉
便箋の白さへ絶交と書く恐怖　華村
(人)頰白の囀り出した春日和　雨舟
(地)白襟に未亡人として見直され　緣之助
(天)灯に泳ぐ女となりて白く塗る　同
同　線　互　選

第一線に立つて悴は死んだそな　雨舟
電線のうなりを聞いて今日も病み　凡愚
水平線俺の希望は小さいなあ　さわだ
大空を劃す線ありクレヨン畵　植夫
コースの白さに立つて胸の高鳴り　華村
青春を病みて死線に描く夢　緣之助

川柳雜誌社　今治句會
一月廿四日　於川柳庵　曾我部宵明選

兼題　丹　前　文庫選

丹前に着替へてバットの箱を出し　禧純
丹前み着て棟梁の幅が出來　心府
丹前はみな呑み込んだ顏でゐる　同
丹前にはやくつろいだ酒となり　一風
丹前へ仲居宿帳もつくる　小松
丹前は倦怠と云ふ型で出る　尼花
榮達は遠し丹前板につき　宵明
丹前のまゝで陳情聽いてゐる　同
丹前が漬物石へ使はれる　同
丹前へたしかに讀めた九谷燒　曉童
(人)丹前で無沙汰を詫びる宿の筆　同
(地)丹前で見て貰ひ度い人に含ひ　同
(天)良パパになる丹前の裾が切れ　宵明
(軸)丹前で抱けば胸毛を子に見られ　文庫

兼題　茶　椀　谷心府選

壁一重茶椀の破れた音を聞　紫陽
苦しさをグッと呑みほす茶椀酒　恭明
朝々の茶椀が遠ふ合宿所　文庫
元旦の茶椀へ蓋がついてゐた　宵明
朝顏の芽をもろてくる欠け茶椀　同
愛の巢の茶椀の音の睦しさ　小松
妻の茶椀がやはり小さい　曉童
(佳)無事な日が箸と茶椀へ廻る　同
(同)沈默に茶椀が二ッある寒さ　一風
(軸)めい〳〵の茶椀へ並ぶ子澤山　心府

兼題　蓙　詞　曉童選

長煙管蓙詞をふつと鼻でうけ　一風
殿樣の蓙詞まぶしいぎんぶすま　宵明
蓙詞など眞似て二階のひとり者　小樓
女また同じ蓙詞をきかされる　心府
半分は女にきかす捨蓙詞　一風
(人)紙芝居蓙詞なかばで飴をうり　恭明
(地)蛇の日傘フッと蓙詞を思ひ出し　心府
(天)政岡の蓙詞へハンカチ確しかめる　宵明
(軸)村芝居忘れた蓙詞三味を入れ　曉童

兼題　小　說　宵明選

小說を友に旅愁の枕にし　恭明
小說の人も僕らもめしにする　小松
小說をたとへにひいて承知させ　一風
小說が餘りに俺と似過ぎてる　禧純
小說家後が出來ない濕泉にしたり　曉童
(佳)小說の好きなマダムは若くゐる　心府

(同)小説がすき又風邪をひいてゐる　文庫
(同)小説の佳境寝顔をそつとみる　暁童
(同)小説のここから好きな聲をあげ　同
(軸)小説へ媚婦はひるの雨をきゝ　宵明

席題　履歴書　小松選

履歴書は重いドアーに恐れ入り　暁童
履歴書の朝を靴音高く出る　宵明
履歴書は懇願と云ふ型で出し　同
履歴書は四角張つた文字ばかり　禧純
履歴書へ又の望みをかけて出し　隆安
(佳)履歴書へ上草履の緒切れてゐる　暁童
(同)文の書いた履歴書を見てしまつた　暁童
(軸)履歴書君が書いたのかれとかれ　小松

席題　過去　一風選

アルバムにこんな嬉しい過去があり　心府
戀人の過去へ小さい嫉妬心　小松
美しい過去へペン〳〵草が伸び　宵明
樂しさはうつととり過去を思ふてゐる　小松
ラヂオの音過去をやたらにゆりもどし　禧純
(佳)過去は過去僕は戀愛至上主義　暁童
(同)過去の無い男が相塲崩すなり　宵明
(軸)過去はみな美しきき曼珠日華　一風

席題　雀　互選

雀、雀うちの子供の赤いひとつみ　暁童
並んでる雀よ金になつてくれ　一風
絹ずれの音に雀の飛び立てり　禧純
朝の陽へ雀夫婦の樣にくる　暁童
雀去んで時計の音にひとりゐる　同
ホプラまつかだ雀が歸る　一風
僕は風邪雀の戀をみてゐたり　暁童
留守をした樣に雀の糞があり　心府
雀よそこは工塲の煙突　宵明
雀ちらほら冬の風吹く　禧純
犬の餌に雀の集ふうらゝかき　心府

川柳雑誌社　**伯耆句會**

一月廿二日　於美笑居　三鴨美笑報

兼題　非常線　銀月柳選

足音へきつと構へた非常線　仙樵
非常線くゞつた猛者に犬が吠へ　希照
(人)非常線半月さへて霜白し　賀駐
(地)非常線越える男にいぢがあり　美笑
(天)非常線何事もなく夜が白み　仙樵
(軸)非常線こんな所でとがめられ　銀月柳

席題　笑顔　互選

入營を笑顔でかくす生活苦　希照
新家庭笑顔で俺れを招待す　千代童
つんとして妾に笑顔の出ぬ日あり　美笑

席題　男　互選

北滿の荒野に散つた男前　小判

席題　障子

嬉れしき日迎える障子張りかへる　美笑
破れてる障子に見せた暮しむき　希照

席題　腕

君ならば腕におぼえのあるはづだ　小判
母親の腕にすがるお小使　希照
なにもかも夫の腕にまかしとき　美笑

席題　スキー　互選

新妻の切なる願い聞いてスキー塲　希照
今朝の雪につこり笑ふスキーヤ　千代童
縣道の坂を子供等スキー塲　小判
びつしよりと汗してスキーにはる　美笑

川柳雑誌社　籤川第二支部　**新年句會**（鳥根）

於高松村青年團修養倶樂部會塲
昭和十年一月三日　好郎報

兼題　初日　綠之助選

妻の聲が明るい初日の出　映二
麗朗と初日へひゞく口笛や　大朗
(人)初日さあ明るさにある才年の塵埃　華村
(地)氏神の石段一つ〳〵に日の陽　好郎
(天)ごちや〳〵雲が初日を邪摩にし　大朗

兼題　生　華村選

命まで捨てた戀とは知らなんだ　映二
短命をもつて生れた秀才よ　好郎
寸秒のタイムを競ふ生命線　田鶴緒
(人)ぢつと聞けセコンドが命を刻ゐ　松濤
(地)生命はながる母の涙に子の涙　綠之助
(天)どぶ川に冬陽ゆけて目高生き　同

兼題　光　紫光選

新世帶妻の指輪が光つて居　映二
五觸の光へ淋しく母の手内職　田鶴緒
光り節穴を通して眼を射たり　松濤
門松や雪の光も新しく　好郎
(人)錢かと思ふ光に足を止め　華村
(地)復興のパラックに光る陽の反射　大朗
(天)親指の爪の光りにぼくの健康　好郎

席題　非常時　好郎選

僕等は男非常時の波に乘る　綠之助
(佳)非常時の送別會は茶でしまひ　映二
(同)非常時を說き澁茶だ呑みたまへ　綠之助

席題　幸福　大朗選

妻へ買ふものを案じてゐる幸福さ　凡太郎

屠屋でも夫婦愛だ幸福よ　映二
居眠の爺やに幸福の浮いて見え　健芳
(人)子を抱きて之が我子よ朝の幸　好郎
(地)幸福な朝だ妻と炭いこす　綠之助
(天)幸福は別なき太陽を浴びて生き　華村

川柳雜誌社
鏃川第二支部　**送別句會**　(島根)

非常時日本・御國の干城となる澄田羅門君・僕等川柳人よりいだしたることは喜びに堪へない昭和十年新春三日送別の句會を高松村川柳倶樂部に於て大地吟社の後援を得て開催す　(好郎報)

羅門氏麻隊入營に對する

送別句　尾添好郎整理

希望の眉あぐればにつこり梅の花　大朗
入營の門出を祝す万國旗　松濤
經驗は入營時の覺悟最後まで　健芳
肉親の願いはたつた星三つ　田鶴緒
君と居れば兵免の俺が淋しぞ　華村
軍隊に伸ぶ川柳に君の足　綠之助
兄御國の干城となる陽や赤し　好郎

松江市公會堂句會　(島根)

一月七日　日野山川兒報
題「足並・公會堂」　互選

足並は犬まで揃ふピクニツク　冬生
足並はガツチリ踏んだ蓮旗　柳人
肥桶が來て足並がやゝこしい　蟹候
秋さらり公會堂のミルツ色　都之介
足並やミリタリズムの鋲が鳴る　蟹候
土砂降りに公會堂の軒を借り　卷二
遠足の足並亂す蛇の皮　山川兒
足並をはつきり聞いた地主なり　同
重さうな足並の軍歌へ黃昏るゝ　陽子女
公會堂みんな灯して豪華版　一雄
費食は公會堂の門を開け　祥月
旅客機に輕母しく見る公會堂　正一
一人では行けぬとこなり公會堂　淞南
足並をラツパで元氣つけられる

鮎美觀月對座吟　(大阪)

酒

紋付のお酒のしゆみへ妻の愚痴　觀月
カクテルに波止場の夜のエロとグロ　同
酌ぐまれをして下さいと受けてゐる　同
ひとり旅酒おちついてくるばかり　同
一合の酒を水屋において留守　鮎美
酒のみすぎてろうそくの灯をかる　同
魂のとろける酒の行衛かも　同

苔汀居句會　(松山)

草樓　清朗報
兼題　戀　選

一人娘の戀へ世間が騒ぎ立て　令人
初戀を秘めて淋しく姉は嫁き　路惠
初戀を諦めて居る親思ひ　不二夫
握られた片手疊をむしつてる　明朗
失戀が動機だと云ふ出世振り　眞沙留
振袖でかくす娘の戀心　利勝
(人)哲學を論じて戀にうとく生き　みどり
(地)失戀がもたらす今日の地位なし　草樓
(天)失戀の痛手酒場の味を知り　巨泉
(軸)兩親に強く逆ふ戀があり　告知板

告知板ネンネコが讀むいゝ日和　素泉選
告知板發車間際に書いて行き　巨泉
告知板暗號で知る二人仲　不二夫
ローマ字で書く譯がある告知板　富士女
一足の違を知つた告知板　壺の内
告知板ソツト涙を拭いてゐる　久
(佳)三次回の字が醉つてゐる告知板　眞沙留
(人)乘りおくれ告知板など見ぬ春　克海
(地)待ち切れぬ氣持を見せて告知板　紅星
(天)告知板無駄と知つて書いて行き　久
(軸)告知板昨日のまゝの田舍驛

某人居畔柳社偶集

一月十九日

席題　偶然　喜山選

偶然の瞳と瞳に歩み寄る　木履
偶然なことだと云つて酒になり　久米雄
正夢であつた手紙を見せに來る　某人
旅に出て車中の戀を見捨て　久米雄
偶然は酒場四五軒を荒して來　同
おでんやの前で逢ふのも惡い緣　某人
芋掘りに偶然拾つた錆びた錢　木履
(人)論敵と偶然バスに乘り合はせ　某人
(地)下戸同志偶然逢つてそれつたけ　同
(天)偶然が酒をたのしい味にする　喜山
(軸)青樓でひよつこり會つた同窓生

席題　鏡臺　木履選

自由結婚鏡臺を買ふ金が出來　久米雄
二階借り鏡臺の横通らされ　某人
鏡臺の前で一ぺんふり返り　喜山
鏡臺に妻の秘密もあつてよし　久米雄

(人)鏡臺は汽車を外と愚痴を聞き　同
(地)倦怠期鏡臺かけの色がはげ　喜山
(天)飴の手で鏡臺へ来て叱られる　某人
(軸)鏡臺に妻のたしなみ並べてる　木履

席題　草　久米雄選

幸福を草だけが知る丘の上　喜山
云ひ切れぬ話へ草はちぎられて　同
ピクニツク草のかほりで街へつき　某人
春だ春草に擴げたお重箱　木履
この草が胃にいゝのかハイキング　某人
(人)夏草の匂ひ俺には野心あり　同
(地)稻妻に草の背高き急ぎ旅　同
(天)藥草が故郷からとゞく寒の入り　同
(軸)思案しに來てゐる畫の草いきれ　久米雄

席題　酒　落　某人選

安産の妻なぐさめる輕い酒落　久米雄
失戀へ駄酒落が過ぎたかと思ひ　同
重役の酒落御機嫌がよいのなり　喜山
(人)夕刊へ酒落のヒントを讀み返し　久米雄
(地)病人の口から酒落を聞いて來る　喜山
(天)駄酒落出るグループ月が出る　久米雄
(軸)うき世なら酒落の解らぬ人とゆく　某人

松井春帆氏を迎へるの夕（今治）

一月廿六日　於川柳庵　曾我部宵明報

席題　再　會　春　帆選

再會へ矢つ張り似合ふ日本髷　一風
再會は電話をかけて腰をすえ　曉童
再會へゆつくり出來ぬ用があり　心府
このまゝで再會の日があるかしら　井出
再會は亦會ふ事にして別れ　心府
再會の友の心の冷たかり　禧純
再會の酒へうれしい幅となる　宵明
(佳)又會うと一人〳〵になつてゆき　文庫
(同)再會へ蓬は萠えて春でした　宵明
(同)愛人の何時逢ひうれと聞かれ　小松
(軸)再會を約す手と手の冷たかり　春帆

席題　焚　火　披講　互選

焚火から呼び返へされる懷手　一風
ノミを磨ぐ顏へ焚火がけむつてき　心府
先生が焚火の兒らを見て通り　小松
焚火して忙しき姿見てゐたり　同
焚火から責任のない腰をあげ　曉童
郵便がきたと焚火へ報らされる　心府
良い話焚火で肩を叩たかれる　一風
わら燒いたあとへ靜かな雨がふり　心府

今井冥坊氏退營祝賀句會（大阪）

一月二十二日夜於カナメ喫茶店　鮎美報

席題　十夜九　かほる選

お化粧も上手になつて十八九　秋子
長二郎が斷然好きな十八九　夕鐘
叱られるまで笑つてる十八九　觀月
お妾の手管にのつた十八九　鮎美
肩上げをとつてほしい十八九　里十九
十八九肌のまるみを見てほしい　靜波
(人)十八九もう嫁くさがるまつてゐ　遊歩
(地)寢ころんで天井がひくい十八九　鮎美
(天)十八九唄に調子をあはせゐ　觀月

席題　塞　空　水　車選

家出して寒空と知るふところ手　鮎美
內職のほこりを拂ふ寒い空　觀月
寒空へつきぬけて來る鐘ひとつ　夕鐘

席題　博　士　新　水選

うなずいたまゝで博士は出てしまひ　觀月
(佳)御臨終博士の數が多すぎる　水車
(同)落付を見せて博士の聽診器　靜波
(同)博士に問へば平凡な治療法　鮎美
(同)診察へ博士は眉をひそめたり　觀月
(人)松の內子の無い博士ゐしがり　かほる
(地)新緣に眼鏡はずして博士ゐる　鮎美
(天)スリツパへ同じ感じを博士持ち　かほる
(軸)たゞ博士だけで此の世を終へなり　新水

席題　電　話　觀月選

電話口今夜の嘘を考へる　新水
片言の電話は母が抱いてゐる　卜居
頭字で話してゐるいゝ電話　夕鐘
伊達卷へ取次電話かゝつて來　同
案外な口を利いてる電話口　水車
すき髮の事を電話で云ふておき　かほる
父の死に知らす電話の吃るなり　鮎美

席題　化　粧　夕鐘選

逢ひにゆく化粧と母は知らぬなり　白菊
弟を叱りながらに眉をひき　觀月
笹の葉に化粧のあとの水をすて　鮎美
コンパクト化粧くづれへ小さすぎ　水車
(秀)合ひの手を敎へてやつて眉をひき　かほる
(軸)でぼちんの顏へまじめな厚化粧　夕鐘

兼題　退　營　良坊選

退營へうれしく炭をついで待ち　かほる
退營日母の柾下駄よくすべり　榮世
退營へ大きくゆれる影法師　鮎美
退營のお膳に鯛が巾をとり　夕鐘
退營の無腰を氣づく顏の艶　新水
退營は今日をかぎりの銃を拭き　水車

編輯の窓

山雨樓

▼本號も延刊となつたことをお詫びするまだ出ぬかと待つて頂いてゐる諸兄に相濟まぬことだが、印刷所の都合で遅れたことを寛恕せられたい

▼路郎主幹の微恙は其の後快癒せられた。御見舞を頂いた諸兄にこゝから御禮申上げる。

▼西島○丸氏の「明治以後の川柳年表」は、全く氏でなくては出來ぬ仕事だ。氏は曾て「川柳家は一人で一事業をせよ」と叫ばれたことがあるが、この信念あらばこそだ。

▼「雜筆春秋」欄は果然良き收獲があつた。今後益々この欄の光彩を增すことを期待してゐる。

新人出でよ。好作家出でよ。

▼日本名所名物川柳東京の卷は漫畫の方が間に合はなかつたので、次號に讓るの已むなきに至つた。

▼編輯局のよきパートナーとして、丹路、與三郎、九波、史呂機見女、某人君等の活躍が約束されたので、益々充實を期する覺悟である。

▼二月の二十日會には艸樂氏が支障の爲め筆者缺席、肝甚の面白い賑やかなトピックも、キング喫茶店の窓から漏れてしまつたことは惜しい。

▼編輯のある夕、路郎主幹夫妻が事務所階下の卓球會館でピンポンをやられた。先生のスタイルが面白いといつて汀柳夫人は笑ひが止まらなかつた。そのあとで汀柳氏と森田選手とのエキヒビションゲームが行はれた。葭乃奥樣もその妙技には舌を卷かれた

▼川柳雜誌社のマッチが翠夢氏の發案で毎月出來てゐる。季節の句を刷つた凝つたもの。十二月の句、十二月うれしい風も少しふけ(路郎)・一月の句、凡聖一如元旦のこゝろ知る 路郎)・二月の句、梅林を距て分家と仲がよく(山雨樓)・尙三月の句は葭乃奥樣が染筆されることになつた。

▼螢ヶ池支部の愚龍、靜太君等の病氣を案じてゐる折柄、松雨君が退院したとの通知に接した切に自愛を祈る。

▼古句研究家として有名な松江在りはせぬかと大いに期待せらるゝ次第」と望をかけてゐられる。その熱誠と情熱に頭が下る

▲久良伎翁から來信に(二・二十四日付「今日掃苔會のために橋場福壽院に川柳と墓を談す、會者 十三人。平賀源内墓は松平藩主以下寄金一萬二千圓、同日墓參、

墓の會夏は戴蚊に惱まされ
吉原も序に墓の部に入れる。」

▼二月十日北久太郎町の旅館「久一」で謠曲の會があつて出席、川柳家北人君と共にうなる、青踏君もわざ〳〵聞きに來てくれられた。

夜半杖の遺句

誰かまた死んだ廊下の音になり
人間の弱さなり死の一歩前
おいそれと醫者へ行けたら嬉しかろ
さればとて石油は飲む氣になれず

長男千晴を呼びて
遺言をして少年の涙を見
遺句
天の命地には骸の還るなり

○日本名所名物川柳投句募集

東京の卷 (三)
「向島」 三句
〃切 三月十日
(四)
〃
「淺草」 三句
〃切 四月五日
以上宛先 本社事務所
用紙 ハガキ

川柳雜誌案內

六號活字十四字詰三行金五十錢、一行增すごとに金十錢（但し廣告切手代用可）敬謝、格調・句會案內、柳壽廣告、その他

並製 **合本特賣**

「川柳雜誌」の合本第二卷より十卷まで

各壹卷 **金壹圓五十錢**

大阪市內送料壹册六錢
市外送料壹册廿四錢

大阪市住吉區平野西之町八三
川柳雜誌社

懸賞川柳募集

題「紅」路郎選 三月十日締切

との他雜吟を募る

▼用紙 官製**ハガキ**（化粧柳壇と明記の事）

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す

▼投吟所 大阪市玉出本通三の三六 麻生路郎氏宛

化粧新聞社

川柳きやり

菊判毎號七十數頁

毎月一日發行一部廿五錢

東京豐島區高田本町二の一
四六八川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

アメリカからも註文殺到

俄然好評の

諸先生御染筆

▽**川柳ネクタイ** 一圓半より

▽**川柳半襟** 二圓より

御申込所

東京市小石川區初音町四
阿部佐保蘭方
川柳趣味普及會

朝報柳壇

雜詠募集 汀柳選

用紙 ハガキ、句數無制限

大阪市西區四ッ橋南
大阪朝報社
增位汀柳宛

毎日川柳の事を掲せてゐる大阪朝報をお讀み下さい。

社告

本社の例會案內希望の方は左記へお知らせをお願ひします

東區道修町五ノ三四
會報係 毛利九波
電話本局一五六四番

劍花坊句碑建設基金募集

川柳中興の祖井上劍花坊の句碑を建立する事に致しました全國柳人の御後援をお願ひ申します。細部に關する事項は發起者に於て協議の上發表、大體の計畫は左の通りです。

一、**建立期**は昭和十年秋の豫定

一、**建立場所**、代表句の選定其他に就ては研究中

一、**募集基金**は**一口金五十錢**、一人幾口なりとも御自由

一、**締切期日** **五月末日**

一、**屆先** 東京市中野區大和田町二八二

發起 柳樽寺川柳會
全國川柳團體

光耀句會三月例會

場所 キング喫茶室 南海線玉出驛下車本通十五間道路北ノ辻西入

時日 第三日曜（三月十七日午後二時）

會費 參拾錢

兼題 「雛祭り」「銀狐」 各題十句以內

光耀會の句會は作句練習の外に社會の知識吸收の目的で開かれてゐます。女流川柳家の方々はふるつて御出席願ひます。遠方の方々は兼題の投句を必ず御記憶願ひます。投句家及び出席者は婦人に限りますが、本社選者の方々でお暇のある方は御出席下さいまして御援助願ひます。

主催 川柳光耀會
幹事 竹內機見女 葭乃

川柳雜誌社關係の人々（順はろい）

賛助員

池澤樂居客員　末弘嚴太郎
長谷川一徹　伊藤彦造
大道弘雄　鳥山一歩
岡本一平　大島濤明
片岡直方　大谷五花村
笠原路生　大西長三郎
嘉納純　岡田三面子
田中辰二　亀井晟修
長崎柳秀　川上三太郎
長岡牛太郎　川村花菱
長野晴濱　米村あん馬
國枝史郎　田村孝之介
藤村作　谷脇素文
藤本卯之助　窪田銀波楼
穎原退蔵　安川久流美
赤井清司　前田雀郎
淺田一　前田五健

同人

岩崎柳路　石曾根民郎
市塲沒食子　長谷川三汀
西村山月　西村明珠
大鶴喜由　大西八歩
奥野禿山　遊丘舟
岡田某人
食滿南北　柴谷宰二郎
篠原春雨　小林不涙人
藤里好古　森東魚
吉田水車　吉川啞人
立井登美坊　中西おさむ
中澤濁水　村松夢裡
熊谷紅　松下小柳子
福田鶴峰　朝田新水
近藤勇　後藤青兒
江戸みつる　阿形一杉
明石柳次　青木史呂
眞田幸捐　笹田角丸
北山悟郎
喜多春秋　宮岡白峰
三輪夏曉　水谷鮎美
四葉　芝阿部閑生
清水友帆　平井蒼太
平井春光　高橋かほる
永田里十九　山本丹路
平井輿三郎　姫田夕鐘
日野華水　橋本綠雨
東谷闇路　西田艸樂
廣田六浦　毛利九波
妹尾變人　福田山雨樓
須崎豆秋　麻生葭乃
首藤竹楓　住田亂耽
生田翠夢　麻生路郎

編輯局（同人）

主幹　春元紀太

道頓堀支部（大阪市）幹事庄万よし
九三會支部（大阪市）幹事北山悟郎
神戸支部（神戸市）幹事首藤竹楓
函館支部（函館市）幹事亀井晟修
高知支部（高知市）幹事國澤春水
梅田支部（大阪市）幹事水谷鮎美
螢ヶ池支部（大阪府）幹事福田浮鬼
田邊支部（和歌山）幹事辻左馬
籔川支部　島根縣　幹事尼緑之助
京都支部（京都市）幹事平岩司郎
鳥取支部（鳥取市）幹事中島鐵州
堺支部（堺市）幹事八木美夜路
松山支部（松山市）幹事石丸晴朗
御旅支部（大阪市）幹事生田翠夢
天王寺支部（大阪市）幹事須崎豆秋
鶴町支部（大阪市）幹事宮岡白峯
御池橋支部（大阪市）幹事西いわを
松江支部（松江市）幹事岡崎祥月
塗青支部（大阪市）幹事熊谷紅
大鐵局支部（大阪市）幹事植山九天
西條支部（愛媛縣）幹事荒井英賀夫
光耀會（大阪市）幹事竹内機見女
住吉支部（大阪市）幹事奥野禿山
北濱支部（大阪市）幹事谷村稔
今里支部（大阪市）幹事吉田水車
玉造支部（大阪市）幹事清水友帆
今治支部（今治）幹事曾我部宵明
光笑會（大阪市）幹事永田里十九
新居濱支部（愛媛）幹事越智虹子
伯耆支部（鳥取）幹事三鴨美笑
竹原支部（廣島）幹事町田承春
籔川第二支部（島根縣）幹事尾添好郎
行人會（大阪市）幹事平井春光

投稿規定

▼投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▼「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る

▼「川柳塔」への投句は同人に限る。

▼各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▼文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事

▼締切は嚴守されたし。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募集

第十二卷第五號課題

三月五日締切

（各題十句以內）

▼手拭　橋本綠雨選

▼髮　西村明珠　石柳次共選

第十二卷第六號課題

四月五日締切

（各題十句以內）

▼稅金　須崎豆秋選

▼妻　水谷鮎美選

毎號募集

▼近作柳樽（雜吟十句）　麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）

▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切は事務所宛

定價

一部　金參拾錢

半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢

壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號、りと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひま・▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

廣告料

本誌への廣告に就いては事務所へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

昭和十年二月廿五日印刷

昭和十年三月一日發行

第十二卷　第三號

（毎月一回一日發行）

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

編輯兼發行印刷人　麻生幸一郎

發行所　大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地　川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番

事務所　大阪市天王寺區上汐町一丁目五一番地　川柳雜誌社

電話南六四四番

振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載

賣捌書店

（大阪）大賣捌　二盛社書店—明文堂　其他　市內　各書店—

（東京）東京堂　巖松堂　吉岡書店　玉森堂　紀伊國屋　三味堂（神戸）米田、寶文館（國館）石塚（京都）三它（名古屋）靜觀堂

新刊

法學博士 三面子 岡田朝太郎 先生序・海野夢一佛氏新著

川柳史講話

四六版總特上布裝
極堅牢上製本
口繪寫眞凸版圖
函入四百十餘頁
定價金二圓二十錢
送料金十六錢

江戸時代文學並に國文學詩歌川柳を研究する人々へ

初めて出版されたる川柳史の第一書！

今日まで全世界に行はれて來た詩型中最も短い型態を整へ、日本獨特の修辭と表現とを以つて、自由な内容を縱横無盡に表現してゐるものは川柳である。川柳こそは世上の平凡事を、巧に拉し來つて冷徹なる批評眼に寫し、卽詠して、其處には何等の作爲もなく只眞實あるのみであるが、その卓越せる觀察眼を通じて第三者の眼前に展開せられる時是を觀る者は常に身邊に見聞せる事實の剔抉であるだけに、却つて呆然たる態でふべき言葉であつた。然らば何故に「川柳」と「狂句」とが混同せられたか、それには理由がなければならない。その理由こそは川柳史を繙きて初め理解さるるのである。

斯くの如き川柳を語り、川柳の歴史を語る著者は、夙に江戸文化の研究に志し江戸時代より今日に至る東京を語れる「東京巷談」の筆者として名あり。又川柳に志してより約三十年、或は川柳きやり吟社の主腦部とし、或は日刊新聞雜誌の川柳欄選者として知られ、先著「はしからはしへ」の如きは、江戸文化の研究と川柳の造詣の深きを語るものであり、又、先年は文部大臣の推薦により、藤村作博士、山崎麓學士、岡田朝太郎博士等と共に稀覯本「誹風柳多留」壹百六十七卷を完成せる等、川柳界稀に觀る篤學の人であり且つ初めて公刊せらるゝ本書「川柳史」の著者としての當代第一人者である事を、岡田博士等の等しく絶讃せらるゝ所である。＝荷も文學を解し詩歌川柳を口にする諸彦の絶對的好座右書＝

發行所 東京市小石川區江戸川町八十番地 振替口座東京四〇二七九 交蘭社 電話三五一一 小石川番